

国立国会図書館における露文資料

——その概要と紹介——

庄野 新

- I はじめに
- II 検索のツールと留意事項
- III 資料の大要
 - 1 帝国図書館期
 - 2 国立国会図書館期
- IV おもなコレクション
 - 1 播磨文庫
 - 2 能勢文庫
 - 3 ソビエト連邦政府寄贈図書
 - 4 旧帝国図書館よりの編入露書
 - 5 ロシア地下運動出版物コレクション
 - ① ナロードニキ系資料
 - ② マルクス主義系資料
 - ③ その他の重要資料

I はじめに

時折、当館の利用者や私の友人などから、「一体、国立国会図書館にはロシア語の本は何冊位あるのですか?」と聞かれることがある。そのたびに私は答に窮して、「さあ、よく分かりませんが、ざっと4~5万冊位でしょうか?」と、ひとまずお茶をにごして急場をしのぐのであるが、考えてみると誠に無責任な話である。しかし、それというも、当館にはロシア語の本の数が分る公式、非公式の統計がなく、また当館所蔵の露文資料の所蔵目録(例えば早稲田大学図書館「洋書目録:露文図書篇,第I編」のようなもの)もない。従って所蔵冊数を自信をもっていえる数的根拠がないのである。今回、たまたま標記テーマで本誌に執筆することになったのを機会に、多

少とも数字的に根拠のある計算をしてみた。その結果、偶然にも私の当て推量は、それ程見当ちがいでないことが分り、内心ほっとした次第である。その算定の基礎には、あとでふれることにしよう。

さて、この4~5万冊近い露文資料の全貌を、私が紹介することは力量の点からも不可能に近い。その上、当館がその蔵書を引きついだ旧帝国図書館時代の露文資料については、所蔵冊数は多くはないとはいえ、たまたま私が知りえた範囲で推量するほかないため、知識が不十分である。幸い国立国会図書館創設以後の分については、筆者の入館後数年をへた、1954~55年頃からやっと露文文献の入手が可能になったことと、筆者が社会科学部門の選書関係の仕事にタッチする立場にいたため、ある程度この分野全体を見通しうるのであるが、当館の露文資料のうち、相当な比重をしめる

科学技術部門については、筆者にこの分野の素養がないため、今回の紹介の対象から殆どはずさざるをえない。^(注)したがって、以下に紹介するのは、事実上、人文・社会科学部門の資料に限定されることをおことわりしておく。なお、以下の叙述で、資料名のあとに角カッコに入れて書いてあるのは、当館の請求番号ないし展示場所である。

(注) 創館以来永らく当館に在職され、先年定年退職された西村庚氏は、そのロシア語の語学力と露文資料についての学識で貢献される場所が多かったが、氏が科学技術資料課におられた当時執筆された「国会図書館の露文資料と目録について」(『ナウカの窓』1960年11月号)は、筆者の知るかぎりでは、およそ当館の露文資料の紹介文としては唯一のものである。この時点での当館所蔵資料の簡潔な紹介として役立つのみならず、この頃露文の科学技術資料、とりわけ雑誌の収集に大々的に乗り出していた状況がよく述べられている。

II 検索のツールと留意事項

さきにふれたように、当館にはまだ露文資料だけの蔵書目録がない。また、洋書の閲覧目録も、ロシア文字(一般にいえばキリール文字あるいはスラブ文字)のものを別ファイルしないで、著者・書名目録については見出しにあたる部分をローマ字化(この規則については後述)して、他の諸言語のものと一緒に繰込んである。そのため、露文資料のみを一覧してつかもうとしても不可能である。また、旧帝国図書館時代のものは、国立国会図書館になってからのものとは別建てで、しかも更に、明治5年(1872)―昭和19年(1944)までと、昭和20年(1945)から国立国会図書館への合併までの時期(昭和36年:1961)とに二分されているので、カード目録による検索

は、なかなか手間どるのである。

しかし、国立国会図書館になってからのものは、若干の検索ツールがあるので、これによることができる。

①『洋書速報』(ロシア語特集)

標記『速報』は、1956年4月1日号以来、整理ずみの洋書を分類順排列により半月刊で速報しているが、55号(1958年8月15日号)以来、年3〜4回程度「ロシア語特集」を刊行しているの、これをたどってゆけば、何とか通覧することができる。^(注)毎号400タイトル前後を収録しているが、何ぶん分載形式であるから、体系的把握は困難である。また、そこに記載されている請求記号で、その後、訂正、変更されているがものあるので注意を要する。

(注) 目録室に展示されている『洋書速報』は、その性格上、1年分以内のファイルしか置いていない。参考書誌部経済社会課には、「ロシア語特集号」のみの事務用ファイルがある。

②「国立国会図書館所蔵ロシア語文献目録」1〜3(昭和30〜33年:1955〜58),全3冊〔経済社会課事務用〕

タイプ謄写の粗末なものであるが、①の「ロシア語特集」号が出る以前の『洋書速報』に、毎号ばらばらに収録されていた露文図書約2,300タイトルをピック・アップして、一覧できるようにしたもの。4〜6も準備して『速報』55号に接続させる予定であったが、事情で中断した。なお、3の末尾には、当時まだ未整理であった満鉄東亜経済局旧蔵の洋書中に含まれていた主要露文図書約100点が掲載されている(現在、整理ずみ)。

③「国立国会図書館蔵書目録 洋書編昭

和23~33 (1948~58)」1~2. [目録室備え付け]

当館の洋書全般をふくむ第1期分(創館後最初の10年間分)の蔵書目録である。分類目録であるから露文図書は勿論分散しているが、ある程度主題ごとにまとまっでていることが多いから検索には便利。最大の難点は、この時期にはまだ露文図書が少いことである。前述のように、1954~55年頃から購入が活発化したからである。ついでながら、和漢書については、第2期分、つまり次の10年間の蔵書目録が刊行されているのに、洋書の第2期分の準備・刊行が大幅におくれているのは残念である。第2期分に収録されるものこそ、露文図書のみならず、他の欧文図書も、収集の質量ともに大いに充実してきた時期なのである。第2期分の刊行は、当館の利用者からも強く望まれているものであることを申し添えておく。

④「播磨櫛吉旧蔵書目録」昭和35年(1960)、69頁 [目録室備え付け]

当館の「蔵書目録」別冊第2として刊行されたこの目録は、創館後当館が入手した露文資料中の、いわば目玉ともいうべきもので、すでに内外の研究者から注目され、また利用されてきたものである。俗に「播磨文庫」とよばれているこのコレクションは、約900タイトル(1,200冊)あり、19世紀後半から今世紀30年代頃までに刊行された、政治・経済・社会思想・歴史・地理を中心にした質のよい資料ばかりで、収集者の見識の高さをしのばせる。

ちなみに、故播磨櫛吉氏は「時事新報」社の特派記者として、第1次大戦後発後入露し、首都ペテルブルク(現レニングラード)で1917年の大革命を身をもって体験し

た人である。帰国後退社し、外務省などに関係された時期もあったが、のち専ら読書と研究の生活に入られたと聞く。蒙古史等についての学識も卓抜なものがあることは、このコレクションにも反映されており、更に氏は、太平洋戦争中にヤクボフスキーらの「金帳汗国史」(生活社、1942) [238.04—Y16ウ]の訳業を世に送り出しておられるのである。

全蔵書約6~7,000冊といわれた氏のコレクション中のエッセンスともいべき部分を当館が入手しえたのは、氏とは旧知の間柄で、同じくロシア革命当時「毎日新聞」記者としてモスクワに在り、のち在野のロシア・ソビエト研究家として、更に晩年には当館の「調査及び立法考査局」の調査員をしておられた故黒田乙吉氏の御努力によるものである。なお、播磨氏の旧蔵本のうち、語学関係書は東京外国語大学図書館に所蔵されている。

このコレクションの整理を手がけられたのは、目録法のベテランで旧満鉄奉天図書館以来、ロシア語資料の目録法にも通じておられた故高橋泰四郎氏で、蔵書目録は「播磨文庫」の特色に見合った独特な分類構成をとっており、正確な巻末著者索引と相俟って、資料の検索を頗る容易にしている。

この「文庫」の内容紹介は、「IV おもなコレクション」の項にゆずることとする(14~16頁参照)。

検索のツールとして、列挙するに足りるのは、一応以上のとおりであるが、雑誌、新聞の検索法について一言しておく。

雑誌についても、露文雑誌だけのリストはないから、「国立国会図書館所蔵欧文雑誌目録 1976年末現在」およびその「追録」[目録室雑誌検索台備え付け]による

ほかない。これは誌名のアルファベット順目録で、ロシア文字は前記のようにローマ字化されて、他の欧文雑誌と一緒に排列されている。筆者が教えた限りでは、同目録中の露文雑誌のタイトル数（デッド・タイトルを含む）は約650で、同「追録」中にも約30タイトルあった。このうち科学技術関係雑誌の比重は6割以上ある、と思われる。

新聞については「国立国会図書館所蔵新聞目録 昭和44年11月現在」〔新聞閲覧室備え付け〕があり、巻末付録5「外国語新聞国別所蔵一覧」中の「ソヴィエト連邦」の項をみると、露語の新聞は15紙にすぎず、いささか貧弱である。しかも現在継続中のものは10紙である。「プラウダ」「イズヴェスチャ」のたぐいも、所蔵はせいぜい1930年頃からで、「文学新聞」も永らく中断しており、1975年半ばから再入手した。

次に、カード目録検索上の留意事項について若干ふれておく。

1 翻字規則

図書のカード目録の標目（カードの見出しの部分）、欧文雑誌の冊子目録中の誌名の表記は、当館ではすべてアメリカ議会図書館と同様、ALA（アメリカ図書館協会）のロシア文字翻字規則によっている。したがって、この規則を知らないと検索しにくい。このロシア文字の翻字規則をふくめ、いわゆるキリル文字（スラブ文字）全般についてのALAの翻字規則の一覧表は、前記「欧文雑誌目録」の凡例7に「スラブ文字翻字表」として掲載されているので、是非これを見て頂きたい。

なお、やっかいなことに、当館の目録室周辺のガラス戸棚中に備えてある各国の全国書誌、主要図書館蔵書目録は、国によ

り、館により、翻字規則を異にしている。全米総合目録である“The National Union Catalog”は、ALA方式であるから問題はないが、“British Museum. General Catalogue of the Printed Books”となるとイギリス式で、いくつかの点でALA方式とちがう。“Bibliothèque National. Catalogue Générale des Livres Imprimés”の著者目録編は、フランス語の発音にそった翻字法である。キール大学、世界経済研究所のカタログ（当館は現在、その人名別カタログ“Personenkatalog”を所蔵）だと、ドイツ語発音を考慮した翻字法を採用している。当館は所蔵していないが、スラブ関係コレクションで有名な、“New York Public Library. Dictionary Catalog of the Slavonic Collection”だと、同じアメリカでありながら、ALA方式ではなく、むしろBritish Museumに近い方式をとっている^(注)ので、注意を要する。

(注) 各国語による翻字規則の特徴と、その異同については、筆者はかつて、説明しておいたことがあるが（菊地昌典編「ソビエト史研究入門」東京大学出版会、1976年〔参考図書室書誌コーナー〕pp. 133—4参照）、最近刊行の東郷正延等編「ロシア・ソビエトハンドブック」三省堂、1978年〔GG 8—11〕p. 414に、一覧表がある。

2 団体標目

個人著者の本は、前記の翻字規則さえ覚えれば検索は容易であるが、団体（国家機関、諸官庁、研究機関等）の刊行物の場合は仲々やっかいである。筆者自身、当館が所蔵していることをはっきり知っている資料を、利用者や館内の同僚諸氏から「カードをいくら引いても見つからないが……」と問われて、さて自分がカードを繰ってみると成程仲々分らず、とうとう書庫に直接

とびこんで現物に当り、請求記号をしらべてくる、といった笑えぬ経験をしたことさえある。

要するに団体の刊行物、とりわけ国の諸機関の刊行物は、何もロシア、ソ連邦に限ったことではないが、洋書目録の規則上、主標目の国名をまず英語で表記し、次に機関名、例えば官庁名をそれぞれの原綴り（ロシア語の場合は前記規則で翻字）で記入する、という工合になっている。国名がイギリスやアメリカ合衆国なら、Gt. Brit. とか U.S. ですむところを、政権が交替したロシア・ソ連邦の場合は、国名はすべて Russia で統一しているとはいえ、十月革命以前についてのみ単に Russia ですむが、1917年以降1923年のソ連邦形成以前のロシア共和国は Russia (1917- R.S.F.S.R.)、ソ連邦形成以後は Russia (1923- U.S.S.R.) と変化し〔現在は年次を省略〕、それぞれの次に官庁名が来るのである。これでは図書館の人間でも仲々引きこなせないのが実情である。

共産党大会の議事録の検索などについてもやっかいなことがおきる。1898年の創立から1918年の党名改正までは Rossiiskaia Sotsial-Demokratičeskaja Rabočaja Partija (ロシア社会民主労働党) で、18年以後は Rossiiskaia kommunističeskaja partija (ロシア共産党)、連邦形成後の1923年からは Vsesoiuznaia kommunističeskaja partija (bol'shevikov) (全連邦共産党 (ボリシェヴィキ)) と変化するので、時期による名称の変化に配慮せねばならぬ。なお、1952年以降の党名は Kommunističeskaja partija Sovetskogo soiuza (ソ連邦共産党) である。

こうした例は、数えあげればきりがながい、そのほか、「マルクス主義・レーニン

主義研究所」など、研究機関では、所在地名がさきにくるので、Moskva. Institut Marksizma-Leninizma. で検索する必要がある^(注)。ソ連邦科学アカデミー、およびその所属機関もやっかいな例である。Akademiiâ nauk SSSR とか、さらにそのもとに Institut ekonomiki (経済研究所) とかがついてくる。もっとも、これらの場合、以前のごく一時期のものを除き、現在では必ず書名による副出カードが入っているから、書名が正確に分っているときは、それにより検索した方がよい。どうしても団体名から検索せねばならぬ時は、手間はかかっても、丹念にカードを繰るほかない。その代り、また思わぬ副産物もあるもので、探していた資料以外に、思いがけぬ資料を発見する喜びもある。前記“British Museum”のカタログなどは、“Russia”という標目の部分が250頁もあるが、見てゆくほどに、思いがけぬ場所に、思いがけぬ資料を発見し、やはり“British Museum”は宝の山だな、と実感させられる。

(注) 現在、当館が洋書に適用している「英米目録規則」(Angro-American cataloging rules)では、研究機関等は所在地を冒頭にもってこないで、機関名をすぐに出すことになっているが、この規則適用以前にすでに実績のあるものについては、そのまま踏襲している。しかし、その場合も、ある程度機関名からも参照でたどれるようにしてあるものが多い。

3 NDL 分類目録の併用, その他

NDL 分類表, つまり昭和43年(1968)以来、当館が採用している「国立国会図書館分類表」は、なじみ深い十進分類法とちがいが、独特な一館分類表であるが、分野によっては国名記号と組合せてあるので、検索に利点がある。とりわけ、A表(政治・

行政・法律部門)は、国名記号をうまく利用しているので、たとえば革命前ロシアについてはAR4、革命後はAR5という記号と、2段目に政治・法律部門内の分類をしめす記号を組み合わせてあるので、上記諸部門の分類目録を引くことにより体系的に検索できる。また、政党のところは、A56という政党の分類番号と、2段目にR4またはR5を組み合わせることで、A56—R4は革命前ロシアの諸政党に関するものは概ねここに集っており、A56—R5には革命後のものが集っている。前記議事録も、一部がDC14版(デュ—イ十進分類法)採用時代の方に残っている以外は、大部分、上記の記号のもとに集められている。

そのほか、主題ずばりで引ける件名目録も、人名をふくめて、直接、ある主題を検索できるので、活用してほしいもの一つである。ちなみに、昭和38年(1963)から採用している日本語件名で、洋書の件名カードの「ロシア」(Rosia: 訓令式ローマ字表記)を引くと、ロシア、ソ連邦について全般的に書かれたもの、さらに、ロシアのもとの一政治、一経済、一歴史、一社会、その他主要な分野が集っているので、大量的検索に便利である。勿論、ここには露文図書だけでなく、他の諸言語によるものも一緒に集められていることはいうまでもない。

III 資料の概要

1. 帝国図書館期

この時期の資料は、帝国図書館旧蔵洋書著者目録と件名目録、それに戦後期のみの分類目録で検索できるが、冊子形式のものは全くない。しかも前二者は、明治5年—昭和19年までと、昭和20—36年とに分れて

いる。なお、戦前期の洋書は分類によらない固定排架方式なので、図書の大きさその他により、機械的に数字2段の番号を追い込み式に付与してあり、戦後から国立国会図書館への合併までの時期のものには、DC(デュ—イ十進分類法)が適用されている。

さて、露文資料の内容の点であるが、先人の語るところによれば、帝国図書館時代の洋書の収集は、一般に大変限定されていたが、その代り、主要分野の基本図書はしっかり収集し、とりわけ日本、アジア関係の洋書の収集には可成りよく配慮がなされていたようである。露文資料は全体としてきわめて比重が低く、冊数も勿論少い。

前記、西村庚氏の一文によれば、戦後解体した諸機関から流入したものも含め、300余点と推定しておられる。筆者もその位であろうか、と推測するが、革命前の最もスタンダードな百科辞典であるブロックガウス・エフロンの「Энциклопедический словарь」[037—E61]だけでも40冊をこえるので、冊数はあるいはもう少し多いかもしれない。时期的には、19世紀末から1930年代までの刊行物が多い。西村氏は、内容的には蒙古、極東、シベリア、日本関係の地誌、紀行書が眼につく、としておられるが、筆者が調べた限りでも、この指摘は当たっているようだ。例えば、ポズネーエフの代表著作の一つ「北日本とアジア大陸およびロシアとの関係史史料」(Д.М. Позднеев. Материалы по истории Северной Японии и ее отношений к материкам Азии и России. Токио, 1909—10, 2 тома) [Ba—293]や「日本: 地理的統計的概要」(Япония; Географически-статистический очерк. Токио, 1906) [Aa—12], また、ロシア大蔵省編「朝鮮誌」全3冊(Описание Кореи. СПб.,

1900) [145—30] など、仲々珍しいものがある。前者のドミトリ・ポズネーエフは、ロシアの有名な東洋学者で、1906—10年の間日本に在留しており、在日中にこれらの本のほか日本の当時の尋常小学読本 [Ba—78] や「小学日本歴史」 [Ba—55] の露訳も試み、さらにまた、ロシア人ではじめて漢和辞典の露訳 (「露訳漢和字典」 Япано-русский иероглифический словарь) 東京、明治41年 (1908), 1192 p.) [(洋) 491.739—P 893 r] をおこなった人である。ついでながら、ロシアの著名な蒙古学者アレクセイ・ポズネーエフは彼の実兄である。当館は、その主著の一つ、「蒙古と蒙古人」(Монголия и Монголы. СПб., 1896—98, 2 тома) [915.17—P 893m] ほか数点を所蔵している。

さて「朝鮮誌」の方であるが、これは明治38年 (1905) に農商務省の手で抄訳されて「韓国誌」[99—120] の書名で刊行されており、朝鮮研究の基本図書の一つといえるが、この訳書では、原本第3巻 (統計編) に当る部分は全く割愛されている。

帝国図書館時代の一つの特色は、さきのポズネーエフの本のように、日本国内で刊行された露文図書を可成りふくんでいる点である。つまり、戦前は内務省が国内刊行物をすべて検閲のため刊行者に差出させ、検閲を通ったものが「内務省交付本」(略して「内交」という) として、旧帝国図書館にさし廻されたからである。国内刊行の露文図書もこの例にもれなかった。そこで、例えば日露戦争期に日本に亡命して来ていて、自国の捕虜工作などをしてきたナロードニキ系 (いわゆる「人民主義者」) のロシア人革命家たちが、長崎で刊行したものも入っている。ラッセル「政治論集」(Н.К. Руссель. На политическом темы.

1907) [158—546] やオルジフ編「自由戦士アルバム、第1部」(Альбом борцов за свободу, ч. 1. 1907) [158—556] などがそれである。^(注)

(注) 前者はロシア史研究家和田春樹氏が発見されたもので、これを刊行した長崎「極東社」の他の2書とともに、氏の著書「ニコライ・ラッセル」中央公論社、1973、下巻 p. 241 [GK 486—3] に紹介されている。後者の編者オルジフはラッセルより早く日本に来ていた人で、長崎で「ヴォーリャ」出版社をやっており、このアルバムはナロードニキ系の革命家の写真入り列伝で、A—Mまでの項で終わっている。第2部は予告されていたが未刊に終わっらしい。和田氏上掲書 pp. 243—244 参照。

さて、ほかの露文資料の紹介にうつると、1905年「血の日曜日」の指導者ガボンについての無署名のパンフレット「司祭ガボン」(Священник Гапон. Берлин, 1906) [158—550] があり、「血の日曜日」をめぐるガボンの行動をのべ、巻末に、彼のツァーリ [皇帝] への手紙、労働者へのアピール等を収録している。^(注)

(注) ベルリンで刊行されたこのパンフレットの作成者の立場は明かでない。本稿IVで紹介する「地下文献コレクション」中には、エスエル (社会革命党) が、恐らくジュネーブで刊行した、ガボンの全農民へのアピールその他を集めたパンフレットがある [EB33—99 (30)]。なお、ガボンの英文の「自伝」(The story of my life. London, 1906) [170—64] が帝国図書館旧蔵洋書中にある。

ほかに珍しいものとしては、ナロードニキの「人民の意志」党軍人組織に属していたアシェンブロンネルの「ジュリッセルブルグ監獄」(М.Ю. Ашенброннер. Шлиссельбургская тюрьма. Берлин, 1906) [158—551]

という、20年間にわたる獄中の回想録、また、自由主義的ナロードニキのミハイロフスキーの「革命論集」(Н.К. Михайловский. Революционные статьи. Берлин, n.d.) [158—552] などがあり、今後まだまだ思いがけぬ発見もありうる。

戦後、DC分類によって整理されたものの中には、革命前刊行のロシア史関係の基本図書の一つ、カラムジンの「ロシア国家の歴史」(Н.М. Карамзин. История государства российского. 5. изд. СПб., 1842) [947—K18 i] やミリュコフの「ロシア歴史思想の主潮流」の初版(П. Милоков. Главные течения русской исторической мысли. М., 1898) [947—M644g]、プラトノフの「動乱史概説」(С.Ф. Платонов. Очерки по истории Смуты. СПб., 1899) [947.04—P718 o]、端本ながら、前記ミハイロフスキーの著作集(Н.К. Михайловский. Сочинения)全6巻中の4、6巻 [891.78—M636A] などがある。

革命後の刊行のものでは、1920年代に出された資料集的なものが可成りある。例えば中央文書局(Центральный архивное управление)刊行の「デカбриスト資料集」(Декабристы. М., 1926) [947.07—R969 d]、農民叛乱者「プガチョフ集団資料集」(Пугачевщина. Том 1, М., 1926) [947.06—R969 p]、第1次「大戦期の労働運動」(Рабочее движение в годы войны, М., 1925) [331.09—R969 r]、「1917年における軍隊の崩壊」(Разложение армии в 1917 г. М., 1925) [947.084—R969 r] 等々逸品ぞろいである。

また、法令集としては「ロシア共和国法典集」(Сборник кодексов Р.С.Ф.С.Р. 4. изд. М., 1927) [349.47—R969 s7] があり、これには20年代に出そろうたロシア共

和国の主要法典、すなわち憲法、労働法、土地法、民法、刑法等が1冊に収録されていて便利である。また、端本ではあるが、「帝国主義期国際関係文書集」のうち1914—15年期がある [327—R969m]。ほかに眼につくものを若干挙げておくと、ポポフの「共産党史」(Н. Попов. Очерки истории всесоюзной коммунистической партии (б) 15. изд. Вып. 1, М., 1932) [329.947—P814]、同じく彼の「ウクライナ共産党史」 [329.947—P814—1]、イグナトフの「1917年のモスクワ・ソヴェト」(Е. Игнатов. Московский совет раб. депутат. в 1917г, М., 1925) [947.084—I24m] も貴重である。

また、本来、雑誌形式であるのに、戦後解体された諸機関から数年分が合綴製本されて流入し、図書のグループにまじっているものがいくつかに眼につく。^(注)例えば、歴史関係では「階級闘争」(Борьба классов) [335.405—B734] の1931—33年分の数号ずつが、「歴史雑誌」(Исторический журнал) [905—I86] の1938—41年分、「マルクス主義歴史学者」(Историк-Марксист) [905—I87] の1931—33, 39—41年分がある。「歴史雑誌」には財団法人善隣協会の蔵書印があり、「マルクス主義歴史学者」には蒙古研究所の蔵書印があって、それぞれ旧蔵個所を示している。経済関係では、戦前、著名な経済学者ヴァルガが主宰して雄名をとどろかせた世界経済世界政治研究所の同名の雑誌“Мировое хозяйство и мировая политика” [330.947—M676] の1936, 38—40年分が不揃いながら所蔵されている。

(注) これらの雑誌は端本で、合冊されたものが単行本扱いされているため、当館の前記「欧文雑誌目録」には収録されていないので、注意を要する。

さて、旧帝国図書館所蔵の露文雑誌のうち、特筆すべきものは、何といても「モルスコイ・ズボルニク」〔「海事論集」：Морской сборник〕〔Rn—5〕である。これは1848年に創刊されたロシア海軍軍令部の機関誌で、はじめは技術的なものが多く、面白くない雑誌であったが、間もなく改善、拡充され、海事関係全般、海洋探検史、近隣諸国との交流史にわたる重要史料を提供するものとなった。当館は1895～1915年分を所蔵しているが、印により、昭和14年（1939）に「海軍省文庫」から寄贈をうけたものであることが分る。

日露交流史面からいえば、19世紀中葉のものが貴重なのであるが、幸い「播磨文庫」中には、播磨氏が、古い「モルスコイ・ズボルニク」に掲載された日本関係の貴重な記述部分のみを抜粋して、5冊にまとめられたものが入っており〔915.2—M886〕、それには友人として黒田乙吉氏が、日本語で解説と内容細目を書かれたものが別冊「モルスコイ・ズボルニクについて」としてそえられている。ちなみに、この原本は内外からの利用多く、著しく破損してしまったため、現在、一般に利用できるのは、これのゼロックス・コピー版である。

ついでながら、この雑誌は、革命後もその名称を引きついで、ソビエト海軍機関誌として、現在に及んでいるが、当館は所蔵していない。なお、近々創刊号から1939年までのマイクロ・フィッシュ版がスイスから刊行される由。

前記西村庚氏の一文が、「なお、上野図書館〔旧帝国図書館〕所蔵の露文資料はこれだけではない。同館の裏庭にある外庫には、明治5年創立以来未整理のままほごりに埋れている露文資料が1,000点以上ある」とのべておられるように、整理ずみの約

300冊以外に、旧帝国図書館時代、いろいろな事情で整理されず、退蔵されてきたものが推定約1,000冊位あった。これらは、1960年当時、菊地昌典氏（当時、調査及び立法考査局調査員、現東京大学助教授）が、その頃支部上野図書館長をしておられた故神沢^(注)厩夫氏の御援助、御協力をえて、同館の乙部書庫（外庫）に数日かよい、露文資料をえり分けて一個所に集め、内容の概要を調べられた。そして、1961年の新館移転の際には、著しい破損本をのぞいては、幸い大部分無事新館へ搬入されたのである。これらは、殆どが製本を要するものばかりなので、順次製本に廻ったのち、現在までに数百冊が正式に整理されて当館の蔵書に編入されている。これらの中には、実に貴重なものが多く見出されるが、その紹介はIV—4で行うこととする。

〔注〕 故神沢厩夫氏は戦前、北樺太石油、ついで東亜研究所に勤務され、戦後、当館の創設時に入館された。ロシア語のベテランで、かつてソ連のミコヤン氏が、国会および当館を訪問した際、通訳をされた。晩年、特に人文分野の露文資料の収集に貢献された。

2. 国立国会図書館期

国立国会図書館になってからの露文資料は、その主体は1950年代はじめ、とりわけ54～55年（この頃からやっと、ソ連からの図書の入力が円滑化した）以降の購入本が主体である。それに、50年代後半からはじまったソ連の諸機関、とりわけレーニン図書館（1955年より）、科学アカデミー図書館、サルトゥィコフ・シチュドリン図書館などとの交換ならびに寄贈による入手が加わっている。雑誌についても事情はほぼ同様である。これに、例外的に古書のコレクションの入手というケースが加わり、すでにふれた「播磨文庫」がその代表例であ

る。更に、前述の旧帝国図書館の滞貨図書からの編入本も可成りの量と重要性を持つ。このほか、量的には多くはないが、古書としては、旧満鉄東亜経済局旧蔵の洋書1万数千冊のうち、露文資料が約200点ほどある。これらはすべて整理済みで、1920～30年代刊行の政治、経済・産業関係書が多い。また、もと調査及び立法考査局調査員で、ソ連関係、とりわけ政治・外交事情に造詣の深かった、故能勢寅造氏の遺贈図書(後述)中に約130タイトル、200冊の露文図書がある。その他、外交官、政治家として著名な故芦田均氏の旧蔵書が寄贈されており、氏の在外勤務中に購入されたと思われる今世紀初頭刊行のヨーロッパ政治、外交事情に関する洋書が中心であるが、その中に若干の露書を見出すことができる。^(注)なお、この旧蔵書中には、ロシア語ではないが、フランス語等によるロシア関係書が可成りあることを指摘しておく。

(注) 氏の寄贈図書は、「故芦田均氏寄贈図書目録」〔参考図書室誌コーナー〕として約800冊分が冊子化されているが、この中には露書は2、3点しかない。ところが、実はこの目録に収録されていない追加分の図書が可成りあり、その中に露文図書が数十冊含まれている。ドモウスキ「ドイツ、ロシアおよびポーランド問題」(Германия, Россия и польский вопрос. П., 1924)[A87—176]。クロバトキン「日露戦争——日記より」(А.Н. Куропаткин. Русско-японская война; из дневников……Л., 1925)[GB441—39]、「第1国会10周年によせて」(К 10-летию 1-ой Государственной Думы. П., 1916)[AR4—241—7]など、その質は高い。なお、これら追加分の図書には、寄贈図書の印がない。

ここで本稿冒頭でふれておいた、当館の露文資料の蔵書数の推計を試みてみよう。

私の手もとにある若干の統計数字をもと

にすると、1955年から1977年の間の購入露文図書は、当初は500冊前後で最近は2,000冊近いので、「播磨文庫」の約1,000冊も込みにして、年平均をかりに1,200冊とすると、この23年間に2万7～8,000冊。ソ連諸機関からの寄贈図書は、先年の「ソビエト連邦政府寄贈図書」(後述)約2,000冊を別口とすれば、交換・寄贈がルートにのりはじめた1955～56年以来、過去約20年間の年平均はほぼ400冊とみてよいので、これは推計8,000冊程度となる。更に、旧帝国図書館の旧蔵本、前述の編入本、「能勢文庫」、満鉄露書、その他を合して約1,500冊とすれば、当館所蔵の露文図書は計3万9,000～4万冊と推算しうるのである。

次に、雑誌の所蔵を考えると、未製本のバラのものは一応計算外におくとして、現在の露文の所蔵タイトル650のうち、200タイトルが仮りに15年分のバックナンバーを持っているとし、それらがそれぞれ年平均2冊に合冊製本されているとすると、製本雑誌約6,000冊ということになる。実際は年3～4冊に合本されるものもあり、若干の帝国図書館旧蔵分(「モルスコイ・ズボルニク」など)もあるので、概算約7,000冊とみておこう。そうすると、図書と雑誌(合冊製本分のみ)を総計した露文資料所蔵冊数は、大体4万6～7,000冊ということになるだろうか。以上は、飽くまでも若干の統計数字と、上述のような推定にもとづく筆者の試算なので、その点はお含みおき願いたい。

それにしても5万冊に近い露文資料というのは、近年東京都世田谷区経堂に移転、新装なった「日ソ図書館」(日ソ会館内)が、露書4万冊強とされているのをはじ^(注)め、伝統ある露文資料の蔵書を誇る早稲田大学図書館でも約2万冊、北海道大学スラ

ブ研究センターが恐らく2万数千冊、東京大学も全学合せて2万数千冊位、一橋大学もほぼ同じ位と思われるので（但し、スラブ研究センター、東大はマイクロ・フィルムによるものの比重がかなりあるので、単純な数量比較はいましめねばならない）、当館の所蔵はやはり本邦屈指のもので、その系統的収集の点では勿論まだまだ改善すべき点が多いとはいえ、一般に無料で公開されている図書館という意味では、多くの研究者、利用者に貢献するところ大である、と確信する。

(注) この数字は、「わが図書館を語る——日ソ図書館」『窓』（ナウカ社）22号所収、による。

さて創館以来収集された露文資料の大きな傾向は、一般購入書では、政治、法律、経済、産業、社会、労働、思想など、総じて社会科学分野の比重が可成り高く、「播磨文庫」の購入以後は、歴史ことにロシア・ソビエト史関係の収集も可成り密度が高い、とみてよい。人文関係は、年間の洋書購入予算の館内配分が比較的窮屈であったので、それが露文図書の購入にも影響し、社会科学関係に比し、量的には少い。それでも文学、とりわけロシア文学関係は、ある程度そろっている。特に、1963年頃、ロシア文学者の中山省三郎氏（1947年没）の蔵書（「中山樵」の蔵書印あり）を入手しえたので、これにより、革命前刊行の文学書についてもある程度補強された。その中には、1870年代に農村をテーマに作品を書いた、ナロードニキ作家のグレーブ・ウスペンスキーの全集（Г. Успенский. Полное собрание сочинений. 6. изд. СПб., 1908, 6 томов）〔891.73—U86A〕もあるが、これは可成り珍しい。またきれいに装

幀されたトゥルゲーネフ全集第5版全10巻（1911）〔891.73—T936A2〕、その他、レスコフ、メレシニコフスキーの全集（欠あり）〔891.73—M559A〕、1874～5年版のドストエフスキー全集などがある。

芸術、美術関係は、従来もっとも手薄であったが、幸い前述の「ソ連政府寄贈図書」中に多数含まれており、当館の蔵書の欠を大幅に補いえたのは有難かった。

さて、各分野の個々の資料については、とても取上げきれないので、以下に、セットもの、全集もの、シリアルものなどのうち、重要な所蔵本のみを^(注)挙挙しておこう。

(注) レファレンス・ブック、基本資料、主要史料集などについては、前掲、菊地昌典編「ソビエト史研究入門」中で筆者がコメントをつけておいたが、資料名のあとに〔国会〕と注記してあるのが当館所蔵のものである。

まず、百科辞典では、帝政時代の代表格、ブロックガウス・エフロン^(注)の百科辞典についてはすでにふれたが、ソビエト期になってからのものは「ソビエト大百科」の初版〔037—B693〕、第2版〔参考図書室〕および現在刊行中の第3版〔同室〕とすべて揃っている。小百科（Малая советская энциклопедия）は、戦前版初版〔037—M236〕と戦後の第3版〔参考図書室〕がある。最近完結した「歴史百科」（Советская историческая энциклопедия）全16巻〔参考図書室〕は利用価値が高い。革命前の人名辞典（Русский биографический словарь）〔G G12—12〕は、未完に終わったとはいえ、貴重である。当館のは、クラウスのリプリント版である。ソビエト期になってから出た「革命運動家人名辞典」（Деятели революционного движения в России）も未完に終わったが、ロシアにおける無数の革命家の総覧

になる筈であった。当館にはそのゼロックス版〔GG12—20〕と、東独のリプリント版〔GG12—37〕とがある。

全集類は、文学以外では、マルクス・エンゲルス著作集(Сочинения)第2版〔335.4—M392A2〕、マルクス・エンゲルス手稿集(Маркс и Энгельс. Архив)の第1集(リプリント版)〔EB51—105〕、第2集〔335.4—A721〕(一部分ゼロックス版)が揃っている。

レーニンについては、著作集(Сочинения)第3版全30冊〔EB51—21〕、第4版全45冊〔335.4—L566A4〕および完全全集と銘うたれた第5版全55冊〔335.4—L566A5〕がある。第2・3版は冊数こそ30冊であるが、その注の詳しさと公正さ、各巻末附録の資料編の貴重さのゆえに、いまだに研究者に愛用されている。ちなみに、当館所蔵の第3版は、数年前ある大手洋書店から入手したものであるが、ゴム印で「モスクワ州および市委員会所属党学校図書室」の判が押ししており、2度の蔵書点検をへて、最後に「除籍」の印がついている。これがどういう風の流れ流れて資本主義市場へ出たのであろうか？ 察するに、2・3版の代表編集者はブハーリン、サヴェリエフ、モロトフの3名であるが、前2者は1930年代末に粛清され、更にモロトフも戦後失脚するに及んで、党機関所属の図書室にはこの版は置くにふさわしくないとされ、除籍の末、古本屋に流れ、それがヨーロッパ資本主義国の書店網を経て当館に収まるに至ったのであろう。本にも、深い歴史が刻まれていることがあるのだ。

いざさか脱線したが、レーニンにもどろろ。レーニンの草稿集、いわゆる「レニンスキー・ズボルニク」は、35巻まではリプリント版で、以後38巻まではオリジナル

で所蔵している〔335.4—L556 0〕。前記、レーニン全集第5版は、「完全全集」と銘うたれているのに、この「レニンスキー・ズボルニク」に収録されていて、しかも第5版にもれているものがあるので、この草稿集は依然、有用である。

トロツキーの「著作集」(Сочинения)は、彼の運命を反映して未完に終わったが、既刊の12巻(15冊)のゼロックス版がある〔EB51—20〕。彼の軍事活動面の大作「革命はいかに武装されたか」(Как вооружалась революция)全5冊もゼロックス版で揃えてある〔GG833—72〕(オリジナル版は端本で、2巻第2分冊、3巻第1分冊のみ〔947.084—T858k〕)。

思想家では、ロシアの百科全書家ともいふべきロモノソフの全集(Полное собрание сочинений)〔081—L846p〕全10巻、ベリンスキー全集〔891.7—B431A〕、ゲルツェン著作集(Собрание сочинений)〔081—H576s〕全30巻、チュルヌイシェフスキー全集(Полное собрание сочинений)〔US31—21〕などがある。

次に、歴史関係の資料集の主なもの挙げると、革命前のもので「ロシア歴史協会資料集」(Сборник русского исторического общества)〔GG811—24〕全147巻がクラウス・リプリントの版で揃えてある。革命後の刊行物では、古代史関係では「ロシア年代記集成」(Полное собрание русских летописей)が、オリジナルとリプリント版を合せて、可成りよく揃っている〔GG814—37〕。現代史の分野では、「1905～7年革命資料集」(Революция 1905—1907 гг. в России; документы и материалы. М., 1955—)、
「10月革命資料集」(Великая Октябрьская социалистическая революция; документы и материалы. М., 1957—63)全9巻10冊が

ある。統計資料では、中央統計局の“Труды”は1920年代の各種統計をふくんでいて貴重であり〔DT191—R4—1〕、また、革命後のセンサスとして最も詳しい「1926年センサス」(Всесоюзное переписи населения 1926г.)〔DT231—R5—9〕もあるが、両者ともにゼロックス版で、若干見づらい箇所がある。

雑誌形式で重要なものとしては、革命運動史関係では「フィローエ」(Былое) (IVでやや詳しくふれる)、「プロレタリア革命」(Пролетарская революция. М., 1921—40)〔Z52—B472〕がある。前者はMoutonのリプリント版、後者はゼロックス版で、数号欠けている。現在も科学アカデミー、歴史研究所から続けて刊行されている“Исторические записки”は、先年欠号をクラウス・リプリント版で補ったので、創刊号からほぼ完全に揃っている〔Z51—A308〕。

法令関係についてざっとふれておく。通常ペー・エス・ゼー(ПСЗ)と略称されている帝政ロシア期の法令集(Полное собрание законов Российской империи. 1649—1913)は、マイクロ・フィッシュ版で所蔵している〔YC4—2〕。官報形式のものでは、法令・命令集(Собрание узаконений и распоряжений правительства)があり、これは1863年から1917年10月革命直後までつづいたもので、同じくマイクロ・フィッシュ版で所蔵している〔YC4—1〕。

十月革命後の法令集は、前記官報と同名でエス・ウー(СУ)と略称、1924年のソ連邦の形成までは、「ロシア共和国労農政府」のエス・ウーが実質上、全ソビエト的な意味を持っていた。これは当館には一部分しかない(1917年12月1日～18年末)〔CR5—3—12〕。

1924年のソ連邦形成以後のものは、エ

ス・ゼー(СЗ)と略称される法令集(Собрание законов и распоряжений Рабоче-Крестьянского правительства СССР. 1924—38)がある。これは西独版リプリントで所蔵している(CR5—3—12)。これ以後はエス・ペー(СП)と略称される「政府決定集」があり、1938年から49年までつづいて中断し、57年から復刊した。名称も46年まで「政府」とあったのが、以後「閣僚会議」と変った。これも西独版リプリントがあるが〔前者と同番号〕、ほかに、前記СЗ時代から1949年までを通した、リーデックス社のマイクロ・カード版も所蔵している。なお、СЗとСПとの質的な差は、前者が連邦中央国家机关の法令をすべて収録していたのに対し、後者は連邦政府の決定・命令しかのせていない(しかも、57年の復刊からは命令も省いた)点である。その代り、1936年憲法により最高の権力機関になった最高会議の法令は、別個に「最高会議通報」(Ведомость Верховного Совета СССР)に載るようになった。この「通報」は1955年から所蔵されている〔CR5—2—1〕。

議事録では、帝政時代のドゥーマ(国会)の速記録が第1国会(1906)から第4国会(1912—17)まで、マイクロ・フィルムで所蔵されている〔第1: YC—9, 第2: YC—10, 第3～4: YC7—1〕。現在の最高会議の議事録は、第3期第5会期(1953)以後、現物で所蔵している〔BR5—6—1〕。

なお、以上の法令および議事録のたぐいは、すべて法令・議会資料課で閲覧できる。

最後に科学技術関係資料についてごく簡単にふれておくと、この分野の露文資料は、当館の露文資料全体のなかで可成りの比重をしめている。とりわけ、雑誌の分野での比率がきわめて高いことは、すでにふ

れておいた。質的な面は、筆者の関連知識が乏しいので、明確なことはのべえないが、各部門の基本図書を中心に、科学アカデミー諸機関をはじめとする、各種研究機関の学術報告書のたぐい（多くはシリアル形式）が可成りよく揃っている。また、雑誌形式で刊行されている科学技術の各分野ごとの龐大なアブストラクト誌（Реферативный журнал）も、ほとんどある。しかし、詳細は他日を期して、しかるべき筆者による紹介を待ちたい。

以上で、国立国会図書館になってからの露文資料の概要をのべたが、次に、各コレクション、蔵書グループごとに、多少詳しい内容紹介を試みてみよう。

IV おもなコレクション

ここでは当館が所蔵する露文資料のコレクション、ないし露文資料を多く含むコレクションまたはそれに準ずるものを紹介する。なお、当館のコレクションは、現物は分類番号に応じてすべてばらばらに書庫内に排架されており、別置されているものはない。しかし、それぞれのコレクションの多くは、蔵書印または蔵書票、スタンプ等により、識別できるものが多い。

1. 播磨文庫

すでにこれまで何回か言及したこのコレクションは、II-④で挙げた「目録」が別冊で刊行されているので、これを一覽すれば内容は一目瞭然である。また、この「文庫」の大要と播磨氏の人となりについては、友人として、また同じロシア研究者として、故黒田乙吉氏が「『播磨文庫』について」なる一文を、かつて「びぶろす」誌

上（1960年4月号）に書かれ、主としてロシア史概説、アジア関係、日露関係資料の面を紹介しておられる。

播磨氏は前述のように、みずから蒙古史関係の学術書の翻訳さえ手がけておられたので、蒙古、チベット、中央アジア、シベリア等の歴史、地誌に関するものが多く、またロシア史の通史、時代史、地誌的なものも可成り揃えてある。前者に属するものではブルジェヴァリスキー「蒙古とタングート族の国」（Н.М. Пржевальский. Монголия и страна Тангутов. СПб., 1875—76, 2. тома）〔915.17—P973m〕、前述のポズネーフ（兄）の「北蒙古の諸都市」（Города северной Монголии. СПб., 1880）〔915.1735—P893g〕など革命前のものに加えて、ソビエト政権になってからの諸研究も系統的に集めておられる。後者の、ロシア史通史的なものでは、ソロヴィヨフ「古代からのロシア史」（С.М. Соловьев. История России с древнейших времен. 3. изд. СПб., 18__）〔947—S689i3. 全29巻を6冊に合本〕、ソビエト期30年代半ばまで代表的な歴史家とされてきたポクロフスキーの「古代からのロシア史」（М.Н. Покровский. Русская история с древнейших времен）は、革命前の版〔947—P761rp〕と革命後の版〔947—P761r〕が共にあり、通常「ロシア簡略史」の名でよばれている“Русская история в самом сжатом очерке”は、第2版（1923）〔947—P761rs2〕と第10版（1932）〔947—P761rs〕とがある。革命前の自由主義的歴史家であり、政治家でもあるミリニコフのものは、有名な「ロシア文化史概説」（П.Н. Миллюков. Очерки по истории русской культуры. СПб., 1905—13, 3 тома）〔947—M664o〕前掲「ロシア歴史思想の主潮流」の第3版（СПб.,

1913) [947—M644 g 3] がある。ロシアの地誌で逸しえないのは、ヴェニアミン・セミョーノフ＝チャン＝ジャンスキー編集の「ロシア地誌総覧」(В. Семенов-Тянь-Шанский. Россия: полное географическое описание нашего отечества) [914. 7—S 418 r] で、全20巻の予定が第1次大戦で中断、11巻で終わったものの、ロシア各地の自然地理、経済、歴史等を図入りで説明している。この編者の父ピョートル・セミョーノフこそは、いうまでもなく高名なロシアの地理学者で、長ったらしい姓の由来も、彼がはじめて探検した天山山脈〔チャン＝ジャン〕にちなんで、もとの姓に重ね、ダブル・ネームとしたからである(米川哲夫氏の御教示による)。前記「地誌総覧」も父ピョートルが総監修をしている。父ピョートル自身が編集した「絵のようなロシア」(Живописная Россия. СПб., 1882—95) [914. 7—S 471 z] も、未完におわったが、ロシア各地(辺境もふくめて)の人文地理学的叙述である(4巻5分冊所蔵)。

この文庫のもう一つの特色は、航海記、日露交渉史関係資料の豊富さである。この「目録」の巻頭には、有名なクルーゼンシュテルン「世界周航記」(И.Ф. Крузенштерн. Путешествие вокруг света в 1803, 4, 5 и 1806. СПб.-М., 1809—1813, 4 тома) [910. 4—K94 p] の第1巻のタイトル・ページの図版が掲げてあるが、これは貴重な本である。おいしいことに、当館所蔵は1～2巻のみで、3巻と地図を欠いている。日本との交渉史では、文化8年(1811)に松前奉行にとらえられ、名著「日本幽囚記」〔邦訳あり〕をのこすことになったゴロウニンの“Записки флота капитана Головинна о приключениях его в плену у Японцев...”の初版本(1816) [915. 2—G 628 zf] があ

り、翌文化9年(1812)クナシリにきて、報復的に日本人高田重嘉兵衛らをとらえたりコルド船長の「日本陸岸への船海ノート」(П.И. Рикорд. Записки флота капитана Рикорда о плавание его к японским берегам ...) も初版本(1816)がある。その他ゴンチャロフの「バルラダ号航海記」(И.А. Гончаров. Фрегат Паллада) [915. 2—G 635 f] (但し第2巻のみ)、マホフの「ディアナ号航海記」(В.Е. Махов. Фрегат “Диана”) [915. 2—M 235 f] など日露交渉史の宝庫の観がある。「モルスコイ・ズボルニク」(海事論集)中の珍しい日本関係記事を編集した5冊の自家製本についてはすでにふれたとおりである(9頁参照)。

最後に、「播磨文庫」の忘れてならぬもう一つの特色は、ロシアの社会運動史、革命運動史関係資料と、ソビエト政権になってからの20年代～30年代ははじめにかけての資料が可成りあることである。前者についていうと、近年リプリント版が公刊されたので珍しいとはいえなくなったとはいえ、マールトフら編の「20世紀初頭ロシアの社会運動」(Общественное движение в России в начале XX-го века. СПб., 1909—14, 4 тома) [947. 08—O 14]、「人民の意志党資料集」(Литература партии Народной Воли. Paris, 1905) [947. 08—N 232 0] は重要なもので、久しく研究者に珍重されてきた。その他、革命運動史関係はいろいろある。テロリストにして文学者、として有名なサヴィンコフ(筆名ロープシン)の回想録(Б. Савинков. Воспоминания. Харьков, 1926) [947. 08—S 116 b]、帝政ロシア最後の皇帝となったニコライ2世の日記(Дневник 1890—1906) [947. 08—N 597 d] なども挙げておこう。

革命後の問題、特に20年代の党内論争、

反対派にかかわるものが相当あるのは注目すべき一特色で、その中にはパンフレットのなものも多いが、この時期の重要性が研究者から注目されてきている現在、「播磨文庫」の持つ意味は大きい。ゾルキン編の「労働者反対派資料集」(M.C. Зоркин, ред. Рабочая оппозиция; материалы и документы, 1920—1926. М., 1926) [329.947—Z89 r], ジノヴィエフ編「労働組合論争資料」(Партия и союзы. П., 1921) [331.880947—Z78 p], トロツキーの「新しい路線」(Л. Троцкий. Новый курс. М., 1924) [329.947—T858 n], トロツキズムに反対する論文集「トロツキー 反対派に抗して」(Против троцкистской оппозиции. М., 1927) [329.947—P967], 主流派ヤロスラフスキーの「反対派に抗して」(Е. Ярославский. Против оппозиции. М., 1928) [329.947—I11 p] などのほか、数多くある。なお、このヤロスラフスキーの定本的党史(後にスターリンに批判され、30年代に「改悪」版を書いた)“Краткие очерки по истории ВКП (б)” М., 1926—28, 2 тома [947.084—I11 k] もある。また、ソ連共産党の大会議事録は、創立期から1920年代のものはフルシチョフ期に大部分が再版されたのに、頗る重要な第14回大会(1925年12月)が未だに再版されない。これが「文庫」中にあるのは有難いことである [329.947—V985 c 3]。ソビエト政権最初の5年間の歩みを示す記念碑的大冊「ソビエト政権の5年」(Пять лет власти Советов. М., 1922) [947.084—P582] も貴重な本である。

以上は決して「播磨文庫」の全貌を伝えるものではなく、その主要特徴の片鱗を示したにすぎないが、大要の紹介は以上にとどめる。ちなみに、この「文庫」に属する図書は、すべてそのタイトル・ページに

「播磨権吉」という四角形の朱印が押してあるので、それと分る。

2. 能勢文庫

すでにふれた故能勢寅造氏の遺贈図書は、「故能勢寅造氏遺贈図書目録」(昭和34年)〔参考図書室書誌コーナー〕として刊行されている。そこには和書約3,000冊; 洋書約550冊が収録されており、氏の専門とされた政治・外交問題、ロシア・ソビエト関係のほか、幅広い分野のものがカバーされている。旧東亜研究所以来の研究者として、また読書家、愛書家としての氏のおもかげをしのぶにふさわしい内容である。さしずめ、露文図書についてのみふれると、洋書約550冊のうち、筆者の算定では露書は約130タイトル、200冊である。

文学書関係に若干革命前刊行の図書を発見しうる以外は、概ね1920～1950年代のもので、とりわけ1950年代のものが多し。これは、50年代前半の露文図書の収集が乏しかった当館の蔵書にとっては、その欠を補うことが出来て有難かった。資料的に貴重なものの第一は、プレハーノフの著作集全24巻であろう(Г.В. Плеханов. Сочинения. М., 1923—27) [308.1—P724 s]。この著作集は「ロシア・マルクス主義の父」プレハーノフの著作の最良の版であり、研究のための素材を豊富にふくむもので、以前から当館の蔵書中に一部分はあったのだが、欠本部分があり、能勢文庫のおかげで全冊揃った。帝政期末のロシア史の碩学クリュチェフスキーの「ロシア史講義」の決定版ともいうべき、ルビンソフ版全5冊もきちんと揃っている(В.О. Ключевский. Курс русской истории. М., 1937) [947—K65 k]。その他の個々の資料については

立ち入らないことにするが、露文資料以外でも、その他の欧文資料および日本語文献のすべてを通じて、この「能勢文庫」が当館蔵書の欠の補充、ないし補強に役立っていることを書きそえておきたい。

ちなみに、この「文庫」に属する図書には、故人の風貌によせて「なまず」の図柄を配した「能勢寅造蔵書」という蔵書票が貼られている。

3. ソビエト連邦政府寄贈図書

昭和48年(1973)に日ソ文化協定の一環として、日ソ両国間に「公の刊行物の交換取りきめ」が締結され、その取りきめに従い、昭和51年(1976)7月当館にレーニン図書館より寄贈された2,027冊のソビエト図書のことである(「国立国会図書館月報」1976年8月号参照)。この内容を一覧できる目録ないしリストはないので、筆者が通覧し、また整理業務を通じて知りえた大要を記すにとどめる。

約2,000冊のうち、大きな部分をしめるのは人文関係で、とりわけ文学、美術の比重が高い。特に美術関係書は、当館のこれまでの蔵書の弱点の一つであったので、今回の「寄贈図書」により、その欠を大幅に補いえたのは幸いであった。美術については、ロシア・ソビエト両期にわたる沢山の画家(アイヴァゾフスキー、ペーロフ、セーロフ、ダイネカ、チスチャコフ、コンチャロフスキー、プラストーフなど)の画集、また従来われわれにはなじみの薄かったアジア諸共和国出身の画家のものなども入っている。また、美術館の案内、宗教美術(イコンなど)、建築とりわけ宗教・寺院建築、各地の名所・旧蹟の案内などがきわめて豊富である。文学も、いく人かの作

家の著作集があるが、特筆すべきはトルストイの最も完全な全集である“Полное собрание сочинений”全90巻〔KP242—16〕がふくまれていることである。これは戦前の1932年から戦後の58年にかけて刊行、完結をみたもので、これを現在、全冊そろえるのは仲々大変であったらうと思う。同じようなことは「ソビエト大百科」の初版本全65巻についてもいえよう。

全体としては、戦後刊行、とりわけ1960年代以降のものが多く、当館がすでに購入して所蔵しているものも相当ふくまれているので(「レーニン全集」第5版ほか)、これらは復本ということになった。もとより、ものによっては、当館として2冊あるいは2組あればかえって有難い場合も勿論あるが、欲をいえば、前以て寄贈予定リストが当館に示され、こちらで所蔵本には印しをつけて重複をさけ、逆にこちらからは希望図書について注文をつけえたならば、より有効であったであらう、と筆者は考える。とはいえ、一旦刊行されたあとは、少し時間をへると忽ち入手が難しくなるソ連の出版事情を考慮するならば、政府の力を以てしても過去の刊行物を千の桁で収集することは仲々大変なことであったであらうと推測する。2,000冊をこえる寄贈図書を取り揃えた努力と好意には率直に感謝せねばなるまい。とりわけ、すでに一旦ソ連国内の図書館の蔵書になっていた本を、その蔵書印を消して、今回の寄贈図書に加えてあったものが幾冊もあったことを思うと、一層そう感ずるのである。

なお今回の寄贈本には、すべて赤のゴム印で「ソビエト連邦政府寄贈図書」と押し込めてある。

4. 旧帝国図書館よりの編入露書

これは別にコレクションというわけではない。前述のように、旧帝国図書館時代に未整理のままで外庫に眠り、国立国会図書館の新館への移転に際して、支部上野図書館から本館へ移され、現在、大部分製本をすませたのち、整理されて正規の蔵書に加えられたものを指している。

これらの資料の刊行時期は、19世紀半ば以降から1930年代はじめまで、とりわけ19世紀末から20世紀初頭のものが多い。内容的には文学（ロシア文学のみならず、西欧の主要文学者、ヴィクトル・ユーゴー、ゾラ、ディケンズ、ゲーテ、シラーなどの露訳本）、宗教、哲学、思想、政治、法律、経済、歴史などの全分野にわたるが、自然科学関係は比較的少く、若干の通俗書も含んでいる。

上述の各分野について代表例を若干示せば、先ず宗教関係ではヴェルシンスキーの「ギリシヤ正教—カトリック東方教会の教会暦」（П.Д. Вершинский. Месяцеслов православно-католической восточной церкви. СПб., 1856）〔HP131—40〕、モスクワとコロムナの府主教フィラレートの見解応答集（Собрание мнений и отзывов Филарета, митрополита Московского и Коломенского.... СПб., 1885—88, т.2,3,5 и допол. том）〔HP131—21〕ほかロシア正教関係書が多数ある。哲学ではストラホフ「哲学概説」（Н. Страхов. Философские очерки. СПб., 1895）〔HD 1—17〕、ラポポルト「哲学史の主潮流」（Х. Раппопорт. Философия истории в ее главнейших течениях. СПб., 1899）〔HA1—5〕などが目につくが、後者の目次最後の部分では、ちゃんとマルクス主義哲

学にも一章をさいている。またカント哲学については、彼の3批判、つまり「純粹理性批判」〔HD49—21〕、「実践理性批判」〔HD49—20〕、「判断力批判」〔HD49—19〕すべての露訳が揃っている。思想関係では、チチャーリンの「政治思想史」（В. Чичерин. История политических учений. 4 тома. М., 1869—74）〔A21—31〕、古代からの社会思想史であるシチュエグロフの大作「社会組織の歴史」（Д. Щеглов. История социальных систем. 2 тома. СПб., 1870—89）〔EB1—6〕、ゴローヴィン「積極的学説としての社会主義」（К. Головин. Социализм как положительное учение. СПб., 1892）〔EB22—42〕などがあるが、後者のような本の存在は、往々誤解されているように、当時のロシア社会とその検閲制度が、およそ社会主義に肯定的にふれたような本の公刊を一切許さぬようなものではなかったことを傍証している、といえよう。

（注） 90年代の半ば近くから、理論的なマルクス主義に対しては検閲が緩和されたことは事実である。ここから、いわゆる「合法的マルクス主義者」がこの時期に活躍することとなった。

特に興味をそそられるのは、原本にベ・エリ（П.И.）というイニシアルの匿名著者表示のついた「将来の社会科学に関する意見」（Мысли о социальной науке будущего. Ч. 1. СПб., 1872）〔EA1—59〕という本である。ベ・エリとは、有名なナロードニキ思想家ピョートル・ラヴロフが使用したペンネームと一致する。しかも当館の所蔵本は、もとの所蔵者が革装の製本をほどこしているのだが、その背文字にははっきり「Лавров」と著者名を入れてある。ところが、ラヴロフは1870年には西欧に亡命して

おり、以後ロシア国内では殆ど本を出して
おらず、ラヴロフの執筆書目を見ても、外国
の主要図書館の蔵書目録にも、この本は見
当らない。内容は一種の社会学論で、少し
前に書かれた彼の有名な「歴史書簡」とも
通ずる面があるように思われるので、ラヴ
ロフの著作と考えても不思議はない。内容
的には特に官権の忌諱にふれるようなもの
ではないが、亡命の身ということもあつて、
ペンネームでロシア国内で刊行した、
ということも充分考えられる。いづれにせ
よ、若干の謎をはらんだ本書について、今
後、研究者諸氏のしかるべき判断と教えを
待ちたい。

政治・法律関係では、ベゾブラゾフの「国
家と社会」(B. П. Безобразов. Государство
и общество. СПб., 1882) [AR4—311—4]、
パフマン「民法法典化の歴史」(С. В. Пах-
ман. История кодификации гражданского
права. Том I—II. СПб., 1876) [AR4—811
—3]、グラドフスキー「ロシア国家法原
理」(А. Градовский. Начала русского госу-
дарственного права. 3 тома. СПб., 1875
—1883) [AR4—211—5]と多彩である。
経済理論関係で筆頭に挙げたいのは、ビ
コフの訳によるアダム・スミス「国富論」
のロシア語全訳本3冊である(А. Смит.
Исследования о природе и причинах богат-
ства народов. СПб., 1866) [DA22—33]。
それにマルクスの「資本論」第2巻の露訳
本初版(1885年)[DA24—78]がある。実態
研究に眼を転ずると、工業関係では、ロシ
ア商工省編「ロシアの工場制工業と商業」
(Фаблично-заводская промышленность и то-
рговля России) が重要で、これは 1893
年の初版本 [DL331—41] と96年の第2版
[DL331—37] (末尾に欠落部分あり) の双
方がある。農業関係、農村共同体について

もいくつかある。取りあえず、ヴァシリチ
コフの「ロシアとその他のヨーロッパ諸国
における土地所有と農業」(А. Васильчиков.
Землевладение и земледелие в России и
других европейских государствах. 2. изд.
2 тома. СПб., 1881) [DM141—39]、サ
ゾフ「ミールは存在するか?」(Г. П.
Сазонов, Быть или не быть общине? СПб.,
1894) [DM141—48] を挙げておく。

革命運動史関係の重要著作の一つである
スピリドヴィチの「ロシアにおける革命
運動」が2冊とも揃っていることも特筆に
値いしよう(А. И. Спиридович. Революцион-
ное движение в России. Вып. 1—2. СПб.,
1914—16) [A56—R4—28]。周知のよう
に、この著者は帝政ロシアの保安部畑で、
終始まさしく革命運動を鎮圧する側にいた
人物である。それにもかかわらず叙述が仲
客観的で、豊富な資料を駆使しているこ
ろから、本書、特にその第2分冊「社会
革命党とその先駆者」は、ほかにこの党の
しかるべき通史がないために、基本文献に
なっている。第1分冊「ロシア社会民主労
働党」も重要ではあるが、1908年までで記
述が終っているため、著者は革命後バ
リに亡命したのち、叙述を1917年まで延長し
た、改訂増補版ともいふべき「ロシアにお
けるポリシエヴィズムの歴史」(История
Большевизма в России от возникновения до
захвата власти 1883—1903—1917. Париж.
1922) を書いている。これはすでに旧帝国
図書館所蔵本の中に入っており [947.084
—Sp 48]、また、戦前に邦訳も出ている
(「露国に於けるポリシエヴィズム発達史」
上・下、大阪毎日新聞社、昭和3年[308—
R51(28)~(29)ウ]。

歴史関係は実に多彩で、とても紹介し切
れないが、近代ロシア史の重要時期を扱っ

たジャンシエフの「大改革期」についての二つの本 (Г.А. Джаншиев. Эпоха Великих реформ. 8. изд. М., 1900) [GG823—42]; Из эпохи Великих реформ. М., 1894 [GG823—72] は欠かせまい。惜しいことに前者は若干頁が欠落している。ネヴェジエンスキー「カトコフとその時代」(С. Неведенский. Катков и его время. СПб., 1888) [GK455—22] も挙げておきたい。注意すべきは、ザプロツキーの「キセリョフ伯爵とその時代」(Заблочкий-Десятовский. Граф П.Д. Киселев и его время. СПб., 1882) のように、全4巻のうち2, 3巻はすでに旧帝国図書館蔵書中に存在し, [923.247—K61z], 1, 4巻が未整理本からの編入本中にある [GK456—10], といった工合に「泣き別れ」しているケースがあることである。利用者はこの点, 注意されたい。

自然科学関係もいくつかある。チャールズ・ダーウィンの主著を4巻本の露訳著作集にしたもの、国際的に知られたアナーキストであると共に、世界的な地理学者でもあったエリゼ・ルクリュエの大作「土地と住民」の10巻本露訳書中の数冊もまじっているが、翻訳ではなくて、そのオリジナリティーの点で筆者の興味をひいたのは、ポポフなる人物の書いた「都市およびその他の人口集中地域における衛生改善策」(М.А. Попов. Искусство оздоровления городов и других заселенных центров. Том 1. М., 1887) [NA217—236] という本である。これは西欧先進諸国の官庁諸報告を縦横に駆使して、何と1970年代の今日、都市の公害対策として考えられている諸問題、大気汚染、塵あい処理問題などを、先駆的に論じているのである。刊年の1887年といえ、わが国の明治20年であることに注意してほしい。

ソビエト期になってからのものにも、いくつか重要なものがある。ここではとりあえず、「中央文書局」刊行の貴重な史料集3点をあげておく。レーニンの兄、アレクサンドル・ウリヤノフも含まれていたことで有名な、「人民の意志」党テログループの公判記録「1887年3月1日」(1 марта. 1887 г. М., 1927) [AR4—771—7], 1905年革命の勃発に驚いた政府側が、労働立法検討のため急遽設置した委員会の史料集「1905年のココフツォフ委員会における労働問題」(Рабочий вопрос в комиссии В.Н. Кокцовца в 1905 г. М., 1926) [EL52—73], 永い反動期の沈滞から、労働運動の再高揚のキッカケとなった「レナ事件」の史料集(Ленские события 1912 г. М., 1925) [EL267—55] と、まさに粒ぞろいである。

以上、実に大雑把な紹介で、しかもソビエト期になってからの文献には少ししかふれ得なかった。しかし、筆者はだたまたま旧整理部で洋書を分類整理していた関係で(当時)、これら旧上野図書館の未整理本からの編入本露書の大部分を手がけた訳だが、その時の印象からいって、革命前ロシアの文化水準の高さに改めて開眼させられた。西欧文献の翻訳についても、19世紀末にかけて集中的に第一級の作品群が続々、しかもしばしば「全集」のかたちで、翻訳されていることは驚くべきことである。時期的にはわが国の明治30年前後に相当するわけだが、当時のわが国の出版文化の状況は、例外を除き、とてもこれには及ばない。ところが日露戦争期のはやり言葉に、「ロシヤ、野蕃国、クロバトキン……」という尻とり文句があり、その後の日本人のロシア観の基礎にはこの意識が知らず知らずに入り込んでいるように思われるが、実は大きな誤りである、といわねばなるま

い。

それにしても、以上の紹介文献が、そのほんの一端にしかすぎないような、龍大で貴重な露文図書が、旧帝国図書館にもたらされたのは、一体どういう経路によるものであろうか^(注)？ また、何故、永らく外庫に放置されていたのであろうか？ 今となつては分らぬことだらけだが、興味を惹かれることではある。

(注) これらの図書のうちの宗教関係のものいくつかには、「在北京ロシア伝道団図書館」(Библиотека Пекинской Русской Духовной Миссии) というゴム印の押されたものがまじっている。この伝道団の歴史は大変古いもので、17世紀末にさかのぼりうるようだ。外交と宗教の両機能が分離したのが1860年で、書庫がつくられたのが1877年である、と石堂清倫氏の一論文はのべている(『在北京ロシア伝道団の業績』『書香』132号、昭和16年9月)。しかし、何故この図書館の蔵書印のあるものが、旧帝国図書館にもたらされたかは矢張り謎である。

外庫に永らく置かれていた事情についても、当時、ロシア語の本をこなせる人がいなかった、ということも一応考えられるが、ほかに、ちゃんと整理されている露書もあるのだから、これだけでは説明がつかない。それのみか、前述のザプロツキーの4巻本のうち、2, 3巻が既に整理され、1, 4巻だけが外庫に残されて今回編入されたような例もあるのだから、一層不思議である。

5. ロシア地下運動出版物コレクション

これは数年前、アメリカのニューヨークにある某書店の手で収集されていた約130タイトルの、主としてロシア国外で刊行された革命運動関係文献の珍しいコレクションを、幸いにも当館が入手し、最近整理を完了したものである。その書店で作成した添附リストには、“A unique collection

of 141 Russian underground, exile freedom of the press publication of the various Russian revolutionary movement; the 19th, beginning of the 20th centuries”^(注)と仮題がつけられているが、これは可成り正確に内容を示している。つまり、ここには前世紀末より今世紀初頭にかけての、ロシアの革命運動の諸潮流、とりわけナロードニキ、エスエル党(社会革命党)系を主体に、マルクス主義系のロシア社会民主労働党、さらにドイツの社会主義者(マルクス、エンゲルスを含む)の著書のロシア語訳本、それに若干の無政府主義系の刊行物、等をふくんでおり、例外的に文学作品もある。その大部分は、帝政ロシア政府の厳しい検閲をのがれるため、それぞれの党派の在外組織がジュネーブ、ロンドン、パリ等で発行した、いわゆる「自由出版」(Вольная печать)であり、1905年革命のち少し検閲がゆるんだ時期にロシア国内で刊行されたもの数点を含んでいる。形態上はパンフレットのものが多く、なかには薄紙の超小型のものさえあり、現在、世界中の図書館を探しても、所蔵されていないのではなからうか、と推定されるものさえある。

(注) このリストの標題中に141点とあるが、当館が入手した段階では10点が既に分売されており、実際に現物入手したのは131タイトルである。売ってしまったものの中には、ナロードニキのシンコ(Л. Шинко)の著作が2点あったのが惜しまれるほかは、幸い重要なものは余りなかった。またこのリストには、革命後しばらくして、アンデルソンという人が当時のペトログラードのロシア公共図書館(現サルトウッコフ=シチェドリノ公共図書館)所蔵の資料をもとに編集した「自由出版目録」(В.М. Андерсон, ред. Вольная русская печать в Российской публичной библиотеке. II., 1920)に載っ

ている文献については、この目録のアイテム・ナンバーを付記して、資料の素姓を明かにしてある。尚、このリストは、経済社会課の事務用として保管されている。

さて、百点をこえるこのコレクションの全貌を紹介することはとても出来ないのので、ここでは資料群中の主要特徴であるナロードニキ・エスエル党（社会革命党）系の資料、マルクス主義者・社会民主労働党系のもの、その他、の三グループに分けて、ごく重要なものだけを取上げよう。なお、このコレクションの請求番号はすべてEB33—99で、それに更に枝番号が(1)～(131)まで通してついているので、以下に請求番号を注記する際は、EB33—99を省略して、枝番号のみを〔1〕〔2〕…と記すことにする。

① ナロードニキ系資料

先ず、1870年代はじめのロシア青年に大きな影響を与えた^(注1)「歴史書簡」の著者であり、ナロードニキの代表的人物の一人であるラヴロフ（П.Л. Лавров, 1823—1900）の著作が4点ある。「ロシアの社会革命的青年たちへ」（Русской социально-революционной молодежи. Лондон, 1874, 60p）〔61〕、「90年代の手稿より」（Из рукописей девяностых годов. Женева, 1899, 71p）〔59〕、「8年を経て」（Через восемь лет, 1871—1879—1887. Женева, 1900, 15p）〔58〕、「未来は誰に属するか?」（Кому принадлежит будущее? п. р., 1902, 103p）〔60〕がそれである。61は、「小冊子ロシアにおける革命的宣伝の任務によせて」と副題があるように、当時彼の論敵で、運動史上しばしば「ロシアのジャコバン主義者」とよばれるうちの一人である、ラディカリストのトカチーフ（П.Н. Ткачев, 1844—85）の

パンフレットへの批判として書かれたもの。59は、1890年代の彼の講演、手記のたぐいを集めてある。58は、西歐へ亡命して1871年のパリ・コンミュンに参加、以後8年づつを経た時点でヨーロッパの政治状況を論じた演説である。1887年3月18日パリ・コンミュン記念日の小集会でおこなったもの（於パリ）。最後の60は、刊年が彼の没後の1902年になっているが、もともとは、彼の亡命後、1873年からチューリヒで彼を中心に出されていた不定期刊の論集「フベリョート!（前進!）」の第2号（1874）に発表されたもの。プロシヤの役人、科学者、企業家、芸術家、革命家が、それぞれの未来社会像を対話風に語る、という設定である。ラヴロフ研究家のボンパーは、この期のラヴロフの作品中で^(注3)「最も道具立てが面白い」と評しているが、筆者は、明治期のすぐれた思想家、中江兆民の「三酔人経綸問答」との類似を、思わず連想せざるをえない。1902年のこの版は、彼の死後、記念出版として、旧「人民の意志党」の生き残りたちが再刊したものの。刊行地が書いてないが、ロシア語で定価1フランと書いてあるから、やはりジュネーブであろう。ついでながら、「ラヴロフ伝」、「思い出集」もこのコレクションに入っている（Биография П.Л. Лаврова [Женева?] 1899, 36p）^(注4)〔57〕、（Памяти П.Л. Лаврова. Женева, 1900, 93p）〔62〕。

〔注1〕 この「歴史書簡」（Исторические писима）の定本といえる第2版（1891）が当館にある〔HD152—7〕。なお、ここではミルトフ（Миртов）というペンネームを使っている。

〔注2〕 この不定期刊「フベリョート!」を、1875～76年の間、同派の隔週刊紙として出していた同名の「フベリョート!」と混同しないこと。前者は1873～77年にかけて5冊刊行さ

れ、後者は2年間に48号出た。当館にはともに Mouton のリプリント版がある〔Z51—D606およびZ51—D607〕。

(注3) P. Pomper. Peter Lavrov and the Russian revolutionary movement. Chicago, 1972, p. 163 参照〔GK459—19〕。

(注4) この伝記には筆者名がないが、上記ボンパーの本の巻末文献目録によれば、ルサーノフ(ラヴロフと親しかった人)としてある。なお、ルサーノフがタラソフというペンネームで書いたものが、このコレクション中にある(K. Тарасов. На рубеже двух царствование. Женева, 1895)〔116〕。1894年にアレクサンドル3世が死に、ニコライ2世(最後の露帝)に代った時点での政治評論である。

次に挙げたいのは、「人民の意志通報」全5冊(Вестник Народной Воли. No. 1—5)〔77〕である。よく知られているように、1870年代後半の重要なナロードニキ組織「土地と自由」結社が、79年夏には組織上の危機に直面し、政治テロを方針とする「人民の意志」党と、政治闘争を否定しナロードニキの伝統的な農村工作路線をとる「土地総割替(土地再分割)」派とに分裂した。後者の中から、プレハーノフ、ザスーリチらは数年後にマルクス主義へとすすむ。前者の「人民の意志」党は、「人民の意志」^(注1)という機関誌を1879年10月から85年12月までに12号出しているが、これとは別に、この「人民の意志通報」がジュネーブで1883—86年の間に5冊だけ出た。そもそも同誌は、1881年3月1日のアレクサンドル2世暗殺の成功で「人民の意志」党の名は世界中にとどろいたとはいえ、組織自体はかえって弱体をさらけ出し、82年春にかけてラヴロフ、クラフチンスキーらが、さきに分裂した二派を統一させることを目ざして創刊が企てられたのである。当然、

プレハーノフも編集者に迎える筈であったが、結局彼はこれに加わらず、統一も果せぬまま、ラヴロフ、チホミーロフ両者の編集でスタートしたのである(S. バロン著、白石治朗等訳「プレハーノフ」恒文社、1978. pp. 146—151 参照)〔EB61—28〕。「革命的政治・社会評論」と副題されたこの雑誌は、^(注2)広く社会主義者たちの寄稿を呼びかけていたが、前述のような経緯もあって、必ずしもその目的を達しえなかったようである。チェバゴリー・モクリエヴィチの回想録、アクセリロードの投稿等を除けば、専ら前記2人の編集責任者が多く執筆しているが、各号とも、当時の運動、思想状況を伝える貴重な証言となっている。また最終号(5号)には、マルクスが1877—78年頃、^(注3)ロシアの雑誌「祖国雑記」宛てに書き、そのまま原稿が陽の目を見ずに終わっていたものを、「カール・マルクスの手紙」として、露訳(原文は仏文)したものがはじめて公表されたのである。

(注1) これは「播磨文庫」のところで紹介した「人民の意志党資料集」に全号収録されている。

(注2) 発刊の辞によれば、「ロシア社会主義の在外機関誌」たらんとするこの雑誌は、編集者の恣意や好みでなされてはならないとし、あらゆる社会主義者が協力、援助してくれるよう求めている。編集責任者として、前記ラヴロフとチホミーロフ(後に転向)が署名している。

(注3) 1877年末、とするのが従来の定説。和田春樹氏はこれを訂正して、78年末としている(同氏「マルクス・エンゲルスと革命ロシア」、勁草書房、1975, p. 102 参照〔GG823—7〕)。この「手紙」の内容と意義については同書参照。なお、この手紙の公表までの経過は、保田孝一「ロシア革命とミール共同体」, 御茶の水書房、1971, pp. 15—16 参照〔DM 141—1〕。

次に、ナロードニキたちのいくつかの流れから、1901年のエスエル党（社会革命党の頭文字をとった通称）の創立、そしてその運動が展開されてゆく過程での関係資料を挙げよう。まず、「チャイコフスキー団」以来の古いナロードニキ、ナタンソン（M.A. Натансон, 1850—1919）が組織した「人民の権利党」（1893年につくられ、翌年忽ちつぶされてしまった）の名で刊行した「焦眉の問題」（Насущный вопрос. London, 1895, 32p）〔78〕からはじめよう。本書の前書きに、前年〔1894〕秋ロシア国内で刊行したものの再版とある。このパンフレットは、専制と闘い、政治的自由を獲得するために、あらゆる勢力を結集することを「焦眉の問題」として、呼びかけている。なお、これは「自由ロシア出版基金」（Russian Free Press Fund）の出版となっているが、この「基金」の趣意書によれば、「ロシアで合法的地位を保っている幾人かのロシア人からの送金によって、1891年夏に、以下に署名した者たちによって設立された」といい、「その目的は、現在ロシアで求められている、自由な〔検閲をうけない、の意——筆者注〕印刷物への要求をみたすことである」とうたっている。署名者は、ロンドンに亡命中のヴォルホフスキー、ヴォイニチ〔ポーランドの革命家〕、ステブニャーク、イギリスのハロウにいるチャイコフスキー、それにバりに亡命中のシンコ（注¹）の5名であるが、実質的中心はステブニャーク（注²）（クラフチンスキー）といわれている。なお、この「基金」の刊行物は、このコレクション中に数点ある。この「基金」がロシアでは禁書になっている諸文献を大々的に刊行した役割は大きい。

〔注〕 ステブニャークのペンネームで知られているクラフチンスキー（С.М. Кравчинский,

1851—95）は、1870年代はじめのナロードニキ・グループ「チャイコフスキー団」以来の古いナロードニキで、作家でもある。1878年西欧に亡命して各地を転々とした。その間に欧文で書かれた「地下ロシア」（邦訳：佐野努訳、三一書房、1970）〔EB33—4〕、「ツァー権力下のロシア」（邦訳：漆原隆子訳、現代思潮社、1969）〔GG819—1〕などが西欧の人びとに与えた影響は大きい。特に前者は、日本にさえ影響を与え、自由民権運動の宣伝のため、その翻案が宮崎夢柳によって明治17年に「虚無党実記・鬼啾啾」として紹介されている。原著の刊行が1882年、つまり明治15年であることを思うと、当時としては大変な速さである。

エスエル党の中心人物の一人であるチェルノーフ（В.М. Чернов, 1876—1952）が、ラザレフ、ヴォルホフスキーら古参ナロードニキとつくった「農業社会主義連盟」（Аграрно-социалистическая лига）の刊行物が2点ある。「シンリーにおける農民同盟」（Крестьянские союзы в Сицилии. London, 1900, 54p）〔1〕、「革命の事業の当面の問題」（Очередной вопрос революционного дела. London, 1900, 28p）〔2〕がそれである。（注¹）前者はイタリアのシンリー島での農民運動の紹介で、後者は、70年～90年代の運動の総括の上に立って、マルクス主義の農民軽視を批判しながら、勤労農民を獲得する、という当面の闘争課題を簡潔にのべている。なお、この「連盟」は、エスエル党結党後も、党内での独自の組織として残った。（注²）

〔注1〕 何故「連盟」がシンリー島の農民運動に眼をつけたか、という事情の背景は、ホブズボーム著、青木保編訳「反抗の原初形態」中公新書、1971の第3章「千年王国主義Ⅲ——シンリー島のファッソと農民共産主義」を読むと理解できよう〔EB33—7〕。

〔注2〕 「連盟」のことは、M. Perrie. The

agrarian policy of the Russian Socialist-Revolutionary Party. Cambridge, 1975 [A56—R4—24] の第3章に詳しい。

前記チュルノーフが、農業県を中心タンポフで組織した「人民権利擁護友愛団」(前掲、和田春樹「マルクス・エンゲルスと革命ロシア」p. 378参照)の資料も見のがせない(Устав Братства для защиты народных прав. Письмо ко всему русскому крестьянству. Женева, 1899, 16p) [15]。この組織の規約と農民へのアピールを収めた薄いパンフレットである。農民問題関係では、エスエル党の刊行物として、ルーデン(本名ポタポフ)の「社会民主主義者たちは『貧農』に何を語っているか?」(А. Рудин. Что говорят социалдемократы “Деревенской бедноте?”. Ж., 1903, 54p) [95]がある。これはレーニンの小冊子「貧農に訴う」批判である。

回想録的なものもこのコレクション中にいくつかあるが、ここではエスエル党結成後、組織された「戦闘団」の中心人物ゲルシュューニ(Г.А. Гершуни, 1870—1908)の有名な回想録「遠くない過去より」(Из недавнего прошлого. Paris, 1908, 243p) [31]を挙げておく。彼は1903年に逮捕され、死刑判決までうけたが、1905年に東シベリアのアカトゥイ監獄に移されたのち、翌年ここから脱走した。アメリカを経てヨーロッパへ行く前に、彼はまず日本に寄り、長崎で前記ラッセル(7頁参照)に会い、ついで東京で宮崎滔天らの仲介で日本に亡命中の孫文とも会っている(和田春樹「ニコライ・ラッセル」下, p. 206参照)。この「回想録」は、アカトゥイに移される前のペトロバヴロフスク要塞監獄とシュリッセルブルグ監獄時代のことを書いている。この本は、彼の同志で1906年に死

んだゴーツの思い出に捧げられているが、彼自身、1908年にチューリヒで病死した。

(注) 当コレクション中の本は、1908年刊のパリ版だが、実は前年、ペテルブルグで刊行された国内版もある。しかし僅か96頁である。

ついでに、このゲルシュューニが死んだ時の追悼文集もあるので紹介しておく(Памяти Г.А. Гершуни. Paris, 1908, 52p) [32]。これには、死後間もなくパリで行われた葬儀の折の追悼の辞、弔電等が収録されている。彼は、パリのラヴロフの墓のとなりにならされた。

なお、さきの「回想録」も、この文集も、エスエル党の出版物として刊行されているが、後にのべる社会民主労働党系の出版物が、表紙等に、必ずマルクス・エンゲルスの「共産党宣言」の結びの言葉「万国の労働者、団結せよ!」を入れているのに対し、エスエル党の場合は、そのスローガンとして「闘いの中にこそ自己の権利を見出せ!」(“В борьбе обретешь ты права свое!”)と書かれている。マルクス主義がいわばより組織的で、国際主義的であるのに対し、エスエル党がより主体的、内発的であることを、これら二つの標語が象徴しているように思われる。

その他の重要人物の著作としては、後期「人民の意志」党からエスエル党に赴いたブルツェフ(В.Л. Бурцев, 1862—1942)のものが7点(うち2点は仏文)ある。この人は、エスエル党の最高首脳部にいたアゼフなる人物が、以前からロシア政治警察がもぐりこませていたスパイであることを暴露して、世界中を驚かせた人として有名であり、また、ロシアの革命運動史研究の重要雑誌「フィローエ」(Вылое [過ぎしこと, の意])の編集者としても名高い。

(注1) 小説よりも奇、ともいふべきアゼフの人物史を、すぐれた歴史家の眼で描いた著作としては、B. ニコラエフスキー著荒畑寒村訳「アゼフ 革命のユダ」現代思潮社、1970 [GK414—1]、新版：「大スパイ 革命のユダ」同社、1978 [GK414—2]がある。

(注2) ロシアの革命運動史の資料と研究をふんだんにふくむこの雑誌は、刊行地をロンドン、パリ [Z52—B466]、ペテルブルグ [Z52—B465] とかえながら、1900～26年まで刊行され(但し、1908年から17年革命まで中断)、再び中断ののちパリで1933年に2号[Z52—B460]だけ出して停刊した。1907年末に弾圧されてペテルブルグで出していたものの刊行が不可能になった時期、Наша страна, Минувшие годы [Z52—B467] と名をかえて刊行した時期がある。これらは1974年Mouton社から全巻リプリントされ、当館所蔵のものは大部分このリプリント版である。

ところでプールのものは、彼の二つの論文を収めた「ツァーリを打倒せよ」(Долой царя. Лондон, 1901, 112p) [17]、人民の意志党関係の資料集である「人民の意志党万歳！」(Да здравствует Народная Воля! Paris, 1907, 96p) [16]、アゼフの暴露に関連して帝政ロシアの政治批判をのべた「ツァーリの責任」(Ответственность Царя. Paris, 1910, 16p) [19]、日露戦争の戦争責任を衝いた「ツァーリと対外政策」(Царь и внешняя политика. Berlin, 1910, 76p) [21]、10月革命後、ボリシェヴィズム批判の公開状として書かれた「ボリシェヴィキに呪いを」(Проклятие вам, Большевики. Stockholm, 1918, 14p) [20]などである。

ナロードニキ・エスエル党系の資料で紹介したいものは、まだまだ沢山あるが、とりあえずエスエル党の協議会議事録を挙げておく(Протоколы первой общепартийной конференции ПС.-Р. Август 1908. Париж,

1908, 238p) [86]。同党は1917年以前、つまりロシア革命の年以前に2回の大会と1回の協議会を開催しているが、このコレクションに入っているのは1908年夏開かれた協議会の議事録である。1906年に第1回、7年に第2回の党大会を持っており、この協議会は、名称こそ「協議会」だが實質上「大会」に匹敵するものと考えてよい。1905～7年の革命の総括の上に立った新方針確立の党会議で、重要である。しかも、^(注)筆者の知るかぎりでは、この協議会議事録を利用した研究にまだお眼にかかっている。

(注) ついでながら、エスエル党は秘密保持が厳重で、議事録中の発言者名もすべて仮名なので、その解読には困難が伴う。例えばイギリスの女流エスエル研究家の前記M. ベリーは、いろいろな資料から推測して、第1回大会の代議員発言者中の11名の本名を割り出している(前掲書, p. 150 脚注参照)。この協議会の発言者の実名もよく分らないが、和田春樹氏は、チェルノフの回想録の記事から、彼がこの協議会で主報告を行っている、と述べている(前掲「ニコライ・ラッセル」下, pp. 264—5 参照)。

エスエル系文献紹介の最後に、エスエルの最左翼として1906年同党から分離した、いわゆる「マキシマリスト」の文献を挙げておく。タグーインというペンネームを使っているが、本名エンゲリガルトによる「チェルノフに答える」(M.A. Энгельгарт. Ответ В. Чернову. СПб., 1906, 48p) [121]である。これはエスエル党の中心人物チェルノフの綱領を根本的に批判したもので、同党からの分離宣言といえよう。

② マルクス主義系資料

まず、マルクスの「哲学の貧困」(ジュネーブ, 1886)、エンゲルスの「フランス

とドイツにおける農民問題」(ジュネーブ、1904)ほか3点の露訳本、ドイツ社会民主党(注1)のペーベル、ブラッケの著作の露訳、ついでに挙げれば、マルクス主義者ではないが、ドイツの社会主義運動を語る時、逸しえないラッサールの代表作の露訳が、それぞれ数点づつある。しかし、これら以上に資料的に貴重なのは、やはりロシア社会民主労働党(この中から生れたポリシエヴィキ派が後のロシア共産党—ソビエト共産党になる)関係の出版物である。

(注1)(注2) 断わるまでもないと思うが、「社会民主主義」という言葉は、現在と異り、当時はマルクス・エンゲルスの思想の正統を含蓄した。マルクス主義的なエルフルト綱領をいただくドイツ社会民主党は、まさしくその正統性の表現であった。ロシアのマルクス主義者の党が創立されたとき(1898年)、ロシアの社会民主(労働)党と名乗ったのは当然であった。しかし皮肉なことに、同党の創立とはほぼ時を同じくしてドイツ社会民主党内に喧嘩したベルンシュタインの修正主義が、その後「社会民主主義」と同義になったのである。ロシアの社会民主主義運動の中に生じた修正主義的傾向は、最初いわゆる「経済主義」(後述)というかたちで現れた。

さて、このコレクション中のロシア社会民主労働党関係の出版物は、その刊行時期が1900年から1905年に到る時期に集中している。このことは、同党が1898年に設立大会を持ったものの、弾圧をうけて忽ち壊滅させられ、その後いくつかの運動の潮流(レーニンがひきいる「イスクラ」派はその一つ)が競い合いながら、実質的には真の創立大会ともいふべき第2回党大会(1903年夏)にいたる前後の、貴重なパンフレット類がふくまれている。したがって、党史上重要なこの時期の研究に際して、ソビエトでの研究や出版物がとかくレ

ーニン派中心に描き出し、他派の主張は、批判の対象としてのみ、孫引きでしか分らない、という状況を、このコレクション中の資料のいくつかは是正してくれる。

では、個々の資料の紹介にうつろう。まず、社会民主労働党系のパンフレットには、各地の労働運動に関するものが多い。「オデッサとニコラーエフにおける労働運動より」(Из рабочего движения в Одессе и Николаеве. Женева, 1900, 30p) [102], 「エカチェリノスラフにおける労働運動」(Рабочее движение в Екатеринбургe. Ж., 1900, 24p) [109], このほかイヴァノヴォ=ヴォズネセンスク地域とコストロマー地域の労働運動を扱った2点 [110] [111] がある。前二者はともに南部の労働運動の先進地帯で、後二者は中央部である。冒頭のパンフレットは無署名だが、トロツキーの著作目録としては最も詳しい L. Sinclair 編 “Leon Trotsky; a bibliography,” Stanford, 1972 [E1—76 (参考図書室)]^(注)によると、ステュクローフとトロツキーとの共同執筆とされている (p. 699 参照)。二人ともユダヤ人だが、ステュクローフの方が1873年生れで先輩格、1890年代はじめからオデッサで活動をはじめている。トロツキーは6つ年下で、彼がはじめて活動をはじめるのが1897年、ニコラーエフにおいてである。

(注) ステュクローフ(Ю.М. Стеклов, 1873—1941)は1903年の第2回党大会以後はポリシエヴィキ派に属し、ソビエト政権になってから、いくつかの著作で貢献している。「社会主義の闘士たち——ロシアにおける社会・革命運動史概説」初版1918, 増補第2版1923—24を書いている。共に「播磨文庫」にある [947.07—S823b; 947.07—S823b2]。また、「バクーニン著作・書簡集」の編集者(4冊で中絶。リブリント版所蔵 [GK415—17]),

「バクーニ伝」の著者でもある（改訂第2版全3巻中の第1巻が、旧帝國図書館からの編入本中にある〔GK415—41〕）。

第2番目のものも無署名だが、エカチェリノスラフで当時活動していた中心人物はララーヤンツ（И.Х. Лалаянц, 1870—1933）らであるから、多分彼あたりの執筆ではなからうか。なお、彼はこの年（1900）4月に逮捕され、1901年のベテルブルグでの学生運動の逮捕者たちとシベリアのヤクーツヤに流刑になるが、その途次のことを記録したパンフレット「シベリアへの学生たちの移送」（Отправка студентов в Сибирь. Ж., 1902, 37p）を、シビルスキーというペンネームで書いたものがこのコレクション中にある〔54〕。

もう一つ注目すべきものは「ユダヤ人労働運動史の転換点」（Поворотный пункт в истории еврейского рабочего движения. Ж., 1900, 22p）〔107〕である。これも無署名だが、後にレーニンと対立してメンシェヴィキ派の中心人物になるユダヤ人、マルトフ（本名ツェデルバウム, 1873—1923）のものとして記されている。彼の伝記を書いたゲツラーは、これを、マルトフがユダヤ人労働運動の先進地域ヴィルナで、1895年のメーデー集会でおこなった演説内容をパンフレットにしたもの^(注)だとしている。この中でマルトフは、ユダヤ人の民族的自立性の擁護と社会主義運動との関連についてのべているのだが、これを出版するイニシアティブをとった「ユダヤ人ブント」という有力組織と彼とは、間もなくユダヤ人組織の独立性の問題をめぐって対立する、という皮肉な運命が待ちかまえていたのだ。

〔注〕 I. Getzler. Martov. Camb., 1967〔GK 465—2〕, 邦訳, 高橋馨訳「マルトフとロ

シア革命」河出書房, 1970, 第2章参照〔GK 465—19〕。

以上5点は、いずれも「ロシア社会民主主義者同盟」（Союз русских социалдемократов）の出版物であるが、この組織は1894年にジュネーブで、もとナロードニキからマルクス主義者に転じたブレハーノフらの「労働解放」団のイニシアティブでつくれた。しかしその後この「同盟」は、いわゆる「経済主義者」（政治闘争より経済闘争を重視）が牛耳っている、として、1900年春分裂し、「労働解放」団は脱退、新たに「社会民主主義者」団をつくる。前掲の5点の大部分は1900年の刊行であるから、この分裂前後に出たものであろう。

労働運動関係でもう一つ挙げると、「オプーホフ労働者の裁判」（Процесс Обуховских рабочих. Ж., 1901, 13p）〔108〕がある。これは1901年5月初旬、ペテルブルグにあるオプーホフ官営鑄鋼工場の労働者数百名が、昼休み後、作業をやめて要求を提出したのに対して、苛酷な弾圧が加えられ、3人の労働者が殺され、9月24—27日の裁判で37名（うち婦人2名）に^(注)厳しい刑罰が加えられたことをアピールするためのパンフレットで、末尾に「ロシア社会民主労働党ベテルブルグ委員会」と「ベテルブルグ解放闘争同盟」とが連名で名をつらねている。オプーホフ労働者の要求というのは、この年の春、学生の専制反対の闘争のあとをうけたメーデー・ストに参加した労働者を解雇したことに対する、撤回要求であった。ストライキは5月7日から17日におよび、遂に軍隊によって鎮圧されたが、「オプーホフの防衛」として運動史に名を残している。

〔注〕 レーニン自身、新聞「イスクラ」第5号

で「新しい殺りく」と題してペテルブルグの労働者に決起をうながしている（邦訳「レーニン全集」第5巻、大月書店、pp.12—17）。また、この裁判の苛酷さに対しても「イスクラ」第10号中の一文「懲役規則と懲役の判決」の中で抗議している（前掲書、pp.251—254）。

これに関連して、労働問題関係のパンフレットを紹介しておく。「1897年6月2日の法律に関する秘密文書」（Тайные документы относящиеся к закону 2-го июня 1897 г. Ж., 1898, 66p）〔113〕は、この労働時間短縮に関する法律成立をめぐる政府機関での討議資料をスッパ抜いたものである。当時ロシアでは労働時間に制限がなく、1日14～15時間というものさえあったが、この法律により、やっと11時間半ときめたのである。レーニンは小冊子「新工場法」（前掲「全集」第2巻、pp.265—313）で、この法律をくわしく検討し、抜け穴だらけの点を批判している。

さて、労働運動史関係の多少ともまとまった記述としては、次のものが逸し難い。タフタリ ューフ（К.М. Тахтарев, 1872—1925）の「90年代ペテルブルグ労働運動概説」（Очерк Петербургского рабочего движения 90-х годов. Лондон, 1902, 112p）〔122〕である。これはペテルブルジュエツ（ペテルブルグ人）というペンネームで書かれており、副題に「個人的回想をもとに」とあるように、運動の渦中でのなまの記述が貴重で、当時の運動の雰囲気、発展段階も分る。この文献は、およそ90年代の首都ペテルブルグの労働運動史としては、基礎文献の一つで、内外の研究者がしばしば利用している^{（注1）}。また、文中、1896年5月の綿工業労働者の大ストライキにもふれているが、このストこそ、前述の労働時間短縮の法律

制定へと、政府をつき動かした原動力であった。この筆者は、ほかにも労働運動関係の論文（前述の「フィローエ」No. 24, 1924所収）を書いており、また、本書の改訂版ともいうべき、20世紀はじめまで記述を拡げたもの（1924年刊）もあるが、これは当館にはない。なお、彼は医学生出身で、90年代前半からペテルブルグで活動をはじめ、独自のグループを形成していたが、のち、はっきり、いわゆる「経済主義者」の立場をとるにいたった。

（注1） 例えば、R. Pipes. Social democracy and the St. Peterburg labor movement 1885—1897. Camb., 1963 [335.43—P665s]（邦訳、桂木健次等訳「レーニン主義の起源」河出書房、1972〔EB61—12〕や、わが国では、（注2）の和田論文参照。

（注2） このストの詳しい研究は、和田春樹「1896年ペテルブルク綿工業労働者のゼネスト」『社会科学研究』25巻4号、1974参照。

ほかに、労働者向けの啓蒙的パンフレットの一つ挙げておくと、「何故ロシア労働者には政治的自由が必要か？」（Почему русским рабочим нужна политическая свобода? Ж., 1902, 11p）〔106〕がある。ロシア社会民主労働党モスクワ委員会の刊行である。内容についてはコメントするまでもあるまい。

以上が、主な労働運動関係の資料グループであるが、さて次に、もう一つの資料グループともいうべき、社会民主労働党々内各派の論争資料の方に眼を転じよう。内容を大まかにいえば、党史上大きな分岐点となった1903年の第2回党大会前後、とりわけこの大会で、これまでレーニンを中心にまとまってきた、いわゆる「イスクラ」派が、例の党規約問題をめぐって「ポリシェヴィキ」派（レーニン派）と「メンシェヴ

ィキ」派（マルトフら）に分裂した直後の時期（特に1904年）の両派の主張に関するものが多い。

第2回大会直前のものとしては、リャザーノフ（Рязанов, 1870—1938）編集の「党綱領作成資料集」（Материалы для выработки партийной программы. Вып. 1—3. Ж., 1902—3）[33]がある。リャザーノフ（本名、ゴールデンダッハ）は、かなり風変わりな人物であるが、亡命中に猛勉強をした博学な人で、ソビエト政権になってから、マルクス・エンゲルス研究所長になり、マルクス主義の始祖たちの文献研究における第一人者であることはよく知られているが、30年代末に粛清された。この当時は「ボリバ」（闘争）団をつくり、レーニンらの「イスクラ」派と、同派が目のかたきにしてきた経済主義者のグループ「ラボーチェユ・ジュエロ」（労働者の大義）派との中間に立って調停派の役割をしようとしていたのである。この「資料集」も、まさしく「ボリバ」団のリャザーノフらしく、第1分冊は「ラボーチェユ・ジュエロ」派の新綱領（但しその理論編のみ）、第2分冊は「イスクラ」派の綱領批判論文、第3分冊は自派の「ボリバ」団の綱領とその解説を収録している。といっても決して中立ではなくて「イスクラ」派に厳しいことは、第2分冊は全編彼の批判論文で、とりわけ第3節は「正統主義の軍服をつけた日和見主義」と題して、はっきりレーニンたちを批判していることを見れば分る。ついでながら、この「ボリバ」団は、第2回大会を前に、党をかく乱した、として大会参加を拒否されてしまった。

第2回大会そのものについての資料は「第2回定期大会公報」（Извещение о втором очередном съезде. Ж., 1903, 31p）[104]がある。大会で採択された綱領と決議が収録

されている。1903年10月の刊行であるから、7～8月に開かれた大会の直後である。収録内容そのものは、今日、色々な資料により知ることができるから、何等珍しくないが、このパンフレットには「ロシア社会民主労働党図書室・文書室^(注)」というゴム印が押しであり、よほど読まれたらしくてボロボロになっている点が注目をひく。

(注) “Российская Социалдемократическая Рабочая Партия. Библиотека и Архив” というゴム印である。同じ印は [48] [105] にもある。ほかに、「ロシア社会民主労働党中央委員会」の印のあるものが7点 [23, 26, 56, 64, 114, 127, 128], 「ロシア社会民主労働党ベルン・グループ」の印のあるものが2点 [13] [42]ある。これらの資料が、どういふ風にして所蔵者を変え、遂に当館の蔵書になるに到ったのか、誠に興味しんしんというほかない。

コレクション中のボリシェヴィキ派の出版物のうち大会後、比較的早く出たと思われるのは、無署名の「党に訴える」（К партии. Ж., 1904, 16p）[105]である。恐らく1904年9月はじめの刊行であろう。本文の終りには「リガ委員会」とあるのみで、本文につづいて、リガ、モスクワ、ジュネーブの三組織の声明が収録されている。ところで現在ではこの論文の執筆者がレーニンであることは明かにされており、「全集」にも収録されている（邦訳「全集」第7巻, pp. 487—495）。内容は、党分裂後の状況をうらい、この事態を救うために早急に第3回大会を召集することを訴えたものである。当時、なぜレーニンの名を伏せたのか？という問題が残るが、恐らくレーニンのような大物、そして党分裂の際の渦中の人物でもあるレーニンを前面に出さないで、多数派（ボリシェヴィキ）を支持する党内大衆の要求（「22人の呼びかけ」

と称されていた)に於いて出された、という形式をとりたかったのではなからうか。

オリミンスキーとボグダーノフが作成したパンフレット「われらの論争」(Наши недоразумения. Ж., 1904, 93p)〔4〕は9月の刊行で、第2回大会でポリシェヴィキ、メンシェヴィキ両派に割れた問題を、その後の状況をふくめて、ポリシェヴィキの立場から論じている。二人の小論を数編づつ集めたもの。標題は、オリミンスキーの冒頭の論文の名からとっている。実はこの二人は、このパンフレットではそれぞれ、ガレルカ、リャドヴォーイというペンネームで書いているが、前者ははじめナロードニキの「人民の意志」党系に属しており、のちにマルクス主義者になり、この時点ではポリシェヴィキ派に属していた。ソビエト政権になってからも、党史関係の資料の編さん等に参画した人。アレクサンドロフが本名。後者はボグダーノフというペンネームの方が有名だが、本名はマリノフスキー(A.A. Малиновский, 1873—1928)である。彼は哲学、経済学、自然科学にも通じた人で、この時点では有力なポリシェヴィキであった。しかし、1907年頃からは次第に党を離れるようになった。哲学論でレーニンから厳しい批判をうけたことは有名である。なお、旧帝国図書館からの編入本中に、彼の「経済学小教程」改訂第2版(Краткий курс экономической науки. 2. изд. СПб., 1899, 321p)〔DA1—291〕があるが、仲々の出来ばえである。同書は革命後も版を重ね、当館には1922年刊行の第10版もある〔330.1—M251k—10〕。

同じくポリシェヴィキ系のパンフレットとして、シャホフの「大会をめざす闘争」(Шахов. Борьба за съезд. Ж., 1904, 114p)〔68〕がある。これは同年10月の刊行とさ

れているが、第2回大会後の党内闘争に関する資料集である。彼の本名はマリーニン(И.И. Малинин, 1877—)で、この小冊子には無署名の「序文」がついており、この資料を研究することによって「党内闘争にかんする自主的な判断」をうることを期待する、と述べている。この「序文」の筆者も実はレーニンで、現在やはり「全集」に収録されている(邦訳「全集」第7巻, p. 455)。

以上3点は、1904年8月に、レーニンとその僚友であるボンチ=ブルエーヴィチ(弟)がはじめた、多数派(ポリシェヴィキ)の思想宣伝のための出版活動の一環として刊行された。ちなみに、前記「党に訴える」の裏表紙には、二人の連名で、党文献、「とくに多数派の原則的立場を擁護する出版」を企図しているから、共感する人びとはこの仕事を物質的、文献的に支持してほしい、旨の声明が出ている。なお、このボンチ=ブルエーヴィチなる人物は、誠に異色ある人なのであるが、彼についてはまた後にふれることにしよう。

このコレクションには、もう一つポリシェヴィキ派のパンフレットがある。クラシコフの「第2回大会について同志たちに訴える手紙」(П.А. Красиков. Письмо к товарищам о втором съезде. Ж., 1904, 23p)〔128〕である。ここではバヴロヴィチというペンネームを使っており、第2回大会で「多数派」と「少数派」に分裂したいきさつをのべつつ、マールトフら「少数派」を批判し、「多数派」の立場を擁護している。

これに対し、メンシェヴィキ(少数派)の立場から議論を展開している資料は2点ある。一つはチェレヴェーニンの「組織問題」(Череванин. Организационный вопрос. Ж., 1904, 56p)〔64〕、今一つは、既にふ

れたメンシェヴィキ派の代表的人物、マールトフの「ロシア社会民主労働党内における『包囲状態』との闘争」(J. Мартов. Борьба с “осадим положением” в Р.С.-Д.Р. П. Ж., 1904, 96p) [126] である。前者は、レーニンの党組織論への真向からの批判で、地方委員会の自立性重視を強調し、これを欠いたレーニ的な党中央委員会の構想は、大衆から遊離した官僚組織になる、と警告している。この小冊子への序文は、マールトフが書いている。なお、チェレヴァーニンの本名は、リブキン(Ф.А. Липкин, 1816—) である。

後者は、第2回大会でレーニンがつくり出した状況を「包囲」にたとえ、これとの自分らメンシェヴィキ派の闘いをのべている。序文に1904年2月の日付があり、副題に「レーニンの手紙への回答」とあるが、この手紙とは「私はなぜ『イスクラ』編集局を脱退したか?」(邦訳「全集」第7巻, pp. 112—119) を指しており、ここでレーニンは、マールトフを先頭とする「イスクラ少数派」に分裂の一切の責任がある、と名ざしでマールトフを批判していたのである。この手紙は先きにパンフレットで出されていたので、マールトフはそれへの反駁というかたちでこれを書いたのである。

以上への追加として、初期の党史ともいうべきものが1点あるので触れておく。

前述したように、ナロードニキの流れをくむエスエル党は、みずからの党史をのこさず、従って、何と帝政ロシアの警察畑の人物であるスピリドヴィチの書いた本が、皮肉にも唯一のエスエル党史になった。これに対し、マルクス主義の立場に立つロシア社会民主労働党の場合は、第2回大会で分裂した事情を反映して、ポリシエ

ヴィキ派とメンシェヴィキ派が、共に自派の正統性を証明するために、競い合って党史の叙述を試みる、という事態が生じ、初期の党史がいくつか誕生した。^(注1) そのうちの最初の一つが、本コレクション中のアキーモフ(В.П. Акимов, 1872—1921. 本名マフノーヴェツ)の「ロシア社会民主労働党の発展の特徴づけのための資料」(Материалы для характеристики развития Р.С.-Д.Р.-П. Ж., 1904, 137p) [66] である。^(注2) 筆者はメンシェヴィキ派の重要人物の一人で、経済主義者の代表的人物とされている。しかし、彼のこの立場が、かえって党成立前後のもろもろの運動のよい叙述を与えることになり、初期党史研究上欠かせぬ文献になっている。

(注1) 各種党史のよい紹介は、加藤一郎「党史研究の歴史」(前掲、菊地昌典編「ソビエト史研究入門」pp. 135—146) を参照のこと。

(注2) アキーモフは、ほぼ同一内容のものを「ロシア社会民主主義発展概論」という題で、翌1905年に刊行している。これは、英訳されて、J. Frankel. Vladimir Akimov on the dilemmas of Russian Marxism 1893—1903. Camb., 1969 [EB61—5] の中に収録されている。

また、同じくメンシェヴィキの立場から書かれた党史で、近年邦訳されたものに次のものがある。マールトフ「ロシア社会民主党史」加藤一郎訳、新泉社、1976 [A56—R4—2]。

③ その他の重要資料

まず、資料集的なものから挙げると、珍しいのは、「ドゥホポール教徒の指導者ヴェリーギンの書簡集」(Письма духоворческого руководителя П.В. Веригина. Christchurch, Eng., 1901, 58, 239p) [72] である。ドゥホポール教徒といっても、現在

ではなじみが少いかもしれないが、ロシアのコーカサス山地にあって絶対平和主義をとなえた農民の土俗宗教集団である。ロシア帝政政府からは、その平和主義と兵役拒否行為のゆえに迫害をうけ、遂にカナダに安住の地をもとめて、1899年、教徒たちは移民船で同地に集団移住したのである。この教徒の指導者がヴェリーギンで、特異な人物であつたらしい。文豪トルストイがこの教徒の窮境を知り、移民のための費用を捻出するため、一時執筆が頓挫していた長編小説を、短期間に完成させたのである。この小説こそ名作「復活」である。

本資料集は、このヴェリーギンの書簡63通（教徒や肉親宛てのもの）を集めたもので、1888年からカナダ移民の年までの約10年間のものである。彼自身はこの期間、極北そしてまたシベリアの果てと、監獄を転々としていたのである。驚くべきことは、何とこの資料集の冒頭に、50頁以上の長大な序文を書いているのが、前記、レーニンの盟友ボンチ＝ブルエーヴィチ（В.Д. Бонч-Бруевич, 1873—1955）である。彼は、その後間もなくポリシエヴィキ派になるが、その後も宗教問題に関心を持ちつづけた数少ない革命家の一人である。この当時はドゥホボール教徒に大に関心をひかれ、彼等の移民の際は1899年4月の第3船に乗りこんで、カナダまでついていったほどである。^(注)なお、この資料集の巻末附録には、トルストイがヴェリーギンに送った2通の書簡も収録されている。ちなみに、この資料集は「ロシア諸教派の歴史研究資料」というシリーズの第1巻で、イギリスで刊行された。発行人はチェルトコフ（A. Chertkoff）になっているが、この人物は、有名なトルストイ主義者で、翁の側近にいた人であるが、ドゥホボール支援運動のかどで

国外追放となり、イギリスでクエーカー派と共に救援運動をつづけていたのである。トルストイ翁にドゥホボールの話強く吹きこんだのも彼である。

（注）日本人の恐らく唯一の研究書は、木村毅「ドゥホボール教徒の話」講談社、1965〔198.99—Ki188d〕である（新版、恒文社）。この項を書くに際しても参照させて頂いた。ボンチのことは、本書 p.307 に出てる。

つぎに、「大学問題資料集、第1集」（Материалы по университетскому вопросу, вып. 1. Stuttgart, 1902, 58p）〔73〕を挙げよう。これは、もともとはゲオルギエフスキーという文部省学術委員会の議長をやっていた人物がまとめた「学生騒動に対する政府の方策・命令概要」からの資料の抜粋である。ストゥルーヴェが序文を付しているが、治安対策用の政府刊行物を逆手にとった感がある。というのは、刊行が1902年であることと、序文を書いている人物に注目する必要があるからである。

この前年、1901年春は首都ペテルブルグで学生が専制反対のデモに立ち上り、学生運動と政府の措置が特に注目をあびた時期^(注)であり、ストゥルーヴェ（II. Струве, 1870—1944）なる人物は、はじめマルクス主義者としてロシア社会民主労働党の創設（1898年）に参画し、有名な創立「宣言」を起草したほどの人である。のち自由主義者の立場に移行したが、1901年春には、学生たちが反対していた政府の「臨時条例」（集団で騒動を起した大学生を徴兵にとるという条例。1899年制定）に反対して行動したため、自由主義的経済学者のトゥガン＝バラノフスキーとともに逮捕されたのであった。彼はこのあと国外にのがれ、ドイツのシュトゥットガルトで、急進自由主義の立場から編集した雑誌「オスヴォボジヂェー

ニエ」(解放)を出しはじめる。この資料集の裏には、この雑誌の広告が出ている。彼は翌年、政治結社「解放同盟」をつくる中心人物の一人になるのである。

なお、この資料集には、1858年から90年にいたる政府の施策関係の資料が系統的に収録されている。これ以後がないのが惜しまれる。

(注) この春の学生運動、ストゥルーヴェの動き、等については、和田あき子「1901年春の学生運動」(「ロシア史研究」19号、1972)参照。

きわめて珍しいと思われるのは、若き日のドストエフスキーとその兄も加わっていたことで知られる「ペトラシェフスキー・グループ」関係資料集である(Общество пропаганды в 1849 г. Лейпциг, 1875, 181p) [79]。このグループは1840年代後半に、ペトラシェフスキー(Петрашевский, 1821—66)を中心につくられたサークルで、フランスの空想的社会主義者フーリエの思想を研究していた。1849年に逮捕され、軍法会議で23人中21名が死刑判決をうけ、執行直前にシベリア流刑にかえられた。ドストエフスキーもその一人であった。この資料集には、政府側秘密文書と最高決裁文書が収録されており、政府の役人リブランドの意見書の抜すいが冒頭にあるが、彼等がこのグループをいかに過大に考えて恐れていたかが分る。ドイツのライプチヒで1875年に刊行されているが、このコレクション中で一番古い刊行物であり、また一番高価であった。

あとまだ取り上げたいものはつきないが、若干眼につく個々の資料に少しふれておく。

旧帝国図書館所蔵露書のところでふれた

司祭ガポンのアピール、手紙を集めた薄いパンフレットがある。1905年革命の口火となった「血の日曜日」の直後の1月15日付で書いた「すべての農民大衆に訴える」(Ко всему крестьянскому люду воззвание) [30]は、刊行地も刊行年もないが、同年末か翌年はじめの刊行であろう。社会革命党(エスエル党)の刊行になっているからジュネーブで出されたと思われる。超小型で薄紙をつかっており、巻末には「ツァーリへの手紙」「内務大臣への手紙」等を付してある。

後期ナロードニキ中の異色ある人物、ルバーキン(Н.А. Рубакин, 1862—1946)の「闘士たちの中で」(Среди борцов. СПб., 1906, 263p) [115]は、彼の随想的文集であるが、ペテルブルグで出されたから合法出版である。事実、内容もむしろ地味である。ここでいう「闘士」とは、決して特別の革命の戦士のことではなく、「勤労大衆のよき未来のために闘っている」自分たちのまわりにいる人びとのことである。この書名、「……の中で」という題名は、ほぼ同じ頃、彼が初版を出した社会科学関係の詳細な文献案内「書物の中で」(Среди книг)を思い起こさせる^(注)。なお、彼の著書は、旧帝国図書館未整理本からの編入図書中に「小さい火花」(Искорки. СПб., 1901, 283p) [KP239—15]という文集があり、そのほか仏文の著作など数点が当館蔵書中にある。この「小さい火花」という書名は、1900年末からレーニンらが出しはじめたロシア社会民主労働党の非合法機関紙「イスクラ(火花)」をもじっているように思われるのだが……。

(注) ルバーキン、特に彼の文献学者としての側面を紹介した好論文として、佐々木照央「ロシアにおける文献学の歴史——ナロードニキ

の文献学者 H. A. ルバーキンの場合) (『経済資料研究』 No. 11, 1976年7月) がある。

スイスの学者 (バーゼル大学教授), トゥーン (A. Thun, 1854—86) がドイツ語で書いた名著「ロシアにおける革命運動の歴史」の露訳本 (История революционного движения в России. Ж., 1903, Вып. 1—2) [123] も興味をそそられるものの一つである。このコレクション中のものは社会革命党 (エスエル党) の刊行で, 古いナロードニキのシンゴが編訳し, 注を付している。割に小型のもので, もともとは2分冊で刊行されたが, コレクション中のものは惜しいことに第2分冊のみである。近年, ドイツ語原本がリプリントされたので (Geschichte der revolutionären Bewegungen in Russland. New York, B. Franklin) [947.08—T535 g], これと比較してみると, ナロードニキの運動に関係ふかい部分を主として訳出しており, しかも叙述の足りないところ, 不正確なところには沢山の注をつけて補足している。「社会革命党」の前史を学ぶためのテキストに代用されたのかも知れない。コレクション中のものには「社会革命党パリ・グループ」というゴム印がかすかに判別され, 表紙は手アカじみてボロボロになっている。

面白いことに, これと同じ年の1903年に, マルクス主義者の側でも競い合うかのようにこの本を露訳し, 同じくジュネーブで刊行している。ヴェーラ・ザスーリッチらの訳で, プレハーノフが可成り長い序文を書いている。「革命的ロシア社会民主主義連盟」^(注1)の刊行である。本書は当館にはないが, 革命後出たこれの第2版 (1920年) が「播磨文庫」中にある [947.08—T535 i]。これで見れば, 前記「社会革命党」の訳本より原著の構成に忠実である。

なお, 忘れえぬことは, 日本でもすでに明治年間に, トゥーンの原本を利用して書かれた本がでていて, という事実である。煙山専太郎「近世無政府主義」(明治35年, 1902) がそれである。^(注2)エスエル系, マルクス主義系, いづれの露訳本よりも, 1年早いことに注目しておきたい。

(注1) この「連盟」は, 1901年10月レーニンの提唱によってつくられた。レーニン, プレハーノフらをふくむ「イスクラ」派の在外代表者組織である。

(注2) 和田春樹, 前掲「ニコライ・ラッセル」下, p. 197 参照。

以上, 20世紀初頭の刊行物の紹介に集中したので, 第1次大戦前後, つまり10年代はじめのものを少し紹介しておく。

バルカンの雲行きがあやしくなってきた1913年, エスエル系の出版物として, アレクサンドロフとヴォルホフスキー共著の「軍事問題について。第1: 国の防衛 (По военным вопросам. No. 1: Оборона страны. Париж., 1913, 32p) [5] がある。ヴォルホフスキーは既に紹介した古いナロードニキだが, アレクサンドロフの方は, 名, 父称がついていないので誰だかよく分らない。このコレクションの添付リストでは, M. S. と断定しているが, もしそうなら, さきに紹介したポリシェヴィキのオリミンスキー (ガレルカという筆名もある) の名と父称のイニシアルである (ミハイル・ステパノヴィチ)。彼もはじめはナロードニキだから, 亡命先きでお互に協力して, 軍事問題で一つのパンフレットを出しても不思議はない。しかし, ここでは彼と断定はしないでおこう。

内容の方は, まず彼の序文は, 政治的自由のある国では軍事問題が自由に議論できるのに, ロシアではそれが不可能だから, 残された唯一の方法は非合法出版のみ, と

のべている。ヴォルホフスキーの序は長く、この出版物は第1に軍人、第2にロシアの民主化の促進に尽きんとするすべての人びとに向けられている、として、フランス革命やロシアのデカブリスト運動で果たした軍人の役割から説きおこしている。このパンフレット中には、フランス社会党を代表してジョレスが議会で提出した兵役法案の露訳もふくまれており、それをアレクサンドロフが批判的にコメントしている。

大戦がぼつ発してからのもものとして、ポリシエヴィキ派のトロヤノフスキー (А. Трояновский, 1882—1955) が書いた「戦争とロシアにおける労働階級の任務」(Война и задачи рабочего класса в России. Ж., 1915, 32p) [125] がある。祖国防衛主義的なふん囲気がつよい中で、労働階級は専制打倒をめざして闘うべきことを訴えている。ポリシエヴィキ派の基本路線どおり、といえよう (しかし彼は、肝心の1917~21年期には、メンシエヴィキ派に移っていた)。この筆者は、先年、駐日ソ連大使をつとめたトロヤノフスキー氏 (Трояновский, Олег Александрович) の父^(注)である。

(注) この点は、和田春樹氏の御教示による。

ポリシエヴィキ派の態度と対照的なのが、メンシエヴィキ派の戦争論である。ヂェイチ、プレハーノフ、アレクシンスキーら数人のメンシエヴィキたちの文集「戦争論」(Война; сборник статей, Paris, 1915, 106p) [130] がそれをよく示している。ヂェイチ (Л.Г. Дейч, 1855—1941) はナロードニキ出身で、のちプレハーノフらの「労働解放」団に加わって活動中に逮捕され、シベリアでの長い流刑生活を体験した人だ^(注)が、その後メンシエヴィキにくわわり、第1次大戦がはじまると、いわゆる「祖国防

衛」派になった。彼はこの論文集の冒頭論文「現在の戦争と社会主義者」を書いているが、今次戦争は世界の強国間のヘゲモニー争いである、と見つつも、最大の責任者はドイツで、そのドイツが仏・露に宣戦布告したのに賛成したドイツ社会民主党の行為は重大な誤りである、と一方的に論難している。そして、ドイツが勝利した時の方が危険がより大きいとし、ドイツが敗北する場合にのみ、将来、「新しいひどい災難」が人類を脅かすことがなくなろう、と論じている。この論法から出てくる態度は明らかであろう。つまり、ロシアの社会主義者は、ドイツを打ち敗かすために、政府の戦争遂行に協力し、祖国を守れ、ということである。

(注) この体験は、Sixteen years in Siberia. London, 1903 [155—109] として刊行されている。

次のプレハーノフの論文は、前年、即ち大戦勃発直後に書かれたパンフレット「戦争について」をうけて、「再び戦争について」と銘うたれている。すでに前年のパンフレットで、彼は何故自分が祖国防衛派となったか、の理由をのべて、「すべての先進的資本主義国は最新式の帝国主義の罪を犯している」としながらも、「そこには区別が必要である」とし、「ドイツの帝国主義こそが他のどれよりも好戦的である……、他のどれよりもヨーロッパの平和に対して危険である」としたのである。前記ヂェイチの議論の枠組が、全くプレハーノフのものであることは明白であろう。「再論」の方では、前年のパンフレットに対する各方面からの批判にこたえる、というかたちをとっている。彼は自分の立場を弁護しつつ、しかもそれがマルクス主義の観点から出てくるものであることを縷々説いているが、

必ずしも説得力はない。

(注) この点については、田中真晴「ロシア経済思想史の研究——プレハーノフとロシア資本主義論争」ミネルヴァ書房、1967、p. 344 参照〔331. 23—Ta762r〕。

途中の論文は割愛するとして、末尾に収録されているのはアレクシンスキー (Г.А. Алексинский, 1879—) の「誰との多数派?」という一文である。この筆者は、1905年革命当時はポリシェヴィキ派で、第2国会へはロシア社会民主労働党の議員として選出された人である。^(注1)しかし、第2国会が解散させられた後亡命し、その後ポリシェヴィキ派からはなれ、前記ボグダノフの立場に近くなり、第1次大戦の時点ではメンシェヴィキ派として、祖国防衛派の立場になっていた。この論文も、その立場からポリシェヴィキ〔多数〕派の敗戦主義の立場がごく少数派であることをやゆしたものである。皮肉なことに、開戦当初こそ愛国熱にうかされて、祖国防衛論が社会の圧倒的多数を占めていたのに、うちつづく戦争とそれによる国民生活の疲弊は、国民とりわけその圧倒的部分である農民、兵士を反戦、厭戦におしやり、ポリシェヴィキ派の立場を逆に多数派とし、十月革命における勝利の大きな要因となったのである。

(注1) 1905年の革命でツァーは国会(ドゥーマ)の開設に踏み切らざるをえなくなった。しかし、ポリシェヴィキは第1回国会選挙をボイコットした。はじめて参加したのは第2国会(1907)からである。

(注2) このコレクション中に、「人民は何をのぞんだか」(Что хотел народ? Париж, 1914, 78p)〔3〕という題の小冊子があり、第2国会の社会民主労働党議員に託した民衆の要望書(ナカーズ)が収録されているが、この序文をアレクシンスキーが書いている。

では最後に、このコレクション中のアナーキスト系資料をざっと紹介する。

ベー (B.) というイニシアルのみの筆者による「自由都市」(Вольный город. 21p)〔8〕、「社会革命の諸任務」(Задачи социальной революции. 12p)〔9〕の2点は、ごく小型の薄いパンフレットである。ベーというのが誰であるか明らかでなく、刊行地、刊年もない。

クロボトキンのものは2点ある。この高名なアナーキストについてはコメントを要すまい。「急進社会主義思想の普及」(Распространение радикально-социалистических идей. 7p)〔50〕と「ある革命家の手記」(Записки революционера. СПб., 1906, 471p)〔923. 247—K93z〕である。前者はフランス語からの露訳で、内容は簡潔な社会思想史である。後者は余りにも有名な彼の伝記で(英文で先きに発表)、既に当館には「播磨文庫」中に同じものが1冊ある。邦訳されていることも周知であろう(「革命家の思い出」勝本良造訳、角川文庫、及び高杉一郎訳、近刊、岩波文庫版)。

以上、可成りの解説を加えながら、主要な資料をグループ的にとり上げてきた。まだほかにも貴重なものがいくつもがあるが、すでに予定紙数を大幅に突破しているので、一応これで筆をとどめる。1978. 12. 17 脱稿

(しよらの・あらた

収集整理部外国図書課主査)

[追記] このコレクションの解説を書くにあたり、かつて添付リストをもとに、ロシア史研究家東京大学助教授、和田春樹氏からいくつもの貴重な御教示を頂戴したことが大いに役立った。氏に厚く感謝したい。

また、このコレクション資料の目録カード

作成に当り、当時の整理部目録課課長大内直之氏（1977年3月に定年退職された）は、レーニン図書館から前記アンデルソンの「自由出版目録」をマイクロ・フィルムで取りよせて参考にされ、また沢山のペンネームが使用されているこれらの資料を、マザーノフの「ペンネーム辞典」(И.Ф. Масанов. Словарь

псевдонимов русских писателей.... Том 1—4. М., 1956—60) [014.7—M364s] にいちいち当って本名を確定された。これらの御努力がなかったなら、この難しい資料の正確な目録カードを作成することはできなかったであろう。ここにお名前を記して、その御努力を銘記したい。

百年後の奇縁

1872年5月長崎港に着いた外国船「ニューヨーク」号から一人のデンマーク人商人が下船した。ルードヴィグ・ヴァーナー・ヘルムズと名乗るこの紅毛人は、京都・江戸をはじめ日本各地を遊覧し、8月には米国に向けて横浜港を発った。

約百年後の1968年11月、ヴァーナー・W・クラブは国立国会図書館20周年記念式典に招かれて来日し、モロッコ皮で装幀した一冊の美本を当館に贈呈した。これは氏の母方の祖父ヘルムズの著書であり、その一章が中国・日本旅行記に割かれている。

因みにヴァーナー・クラブは当館創設の功労者であり、1972年死後その遺蔵書553点が当館に寄贈された。

Helms, Ludvig Verner.

Pioneering in the Far East, and journeys to California in 1849 and to the White Sea in 1878. With illustrations for original sketches and photographs. London, W. H. Allen & Co., 1882. 408p.

(図書館学資料室蔵)

(三谷 弘)

